

俳句雜誌

令和八年六月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十九卷第六号

水 明

2026 6月号



《今月のかな女》

梅雨の蝶ひらく飛びし梢かな

『龍膽』所収 大正十五年

長谷川かな女

年譜によれば、この句は、かな女が三十九歳の時のものであるが、ほぼ同時期に浦和の親戚石関家から生後一年の博を養子に迎えており、家庭内に大きな変化があつた年であつた。自宅の庭であるうか、それとも外出先の路上か公園などの場所かは判断しかねるが、梅雨の晴れ間に夏蝶が木々の梢の辺りを飛んでいる様子に見入っている。夏の蝶にもいろいろと種類があるようで、春によく見かける紋白蝶か、それとも、夏蝶の代名詞のような揚羽蝶なのかと興味がわく。降り続いた雨が止み、嬉し気に飛んでいる蝶と、それを見て心を弾ませているかな女の姿が見取れる。

(鬼之介・註)

今月の巻頭句

季音雪

少年の声は大人に燕来る

石山かつ子

季音月

さまざまな花を揃へて利休の忌

日高道を

季音花

利休忌や北の新地に小糠雨

染谷風子

水明集

手繰り寄す木の間隠れの春の月

岡本祥子

山紫集

春野風貨車ぐひぐひと吸ひ込みて

田中弘子

水 明

令和 8 年
6 月 号

今月のかな女

今月の巻頭句

勘 亭 流 (作品)

白頭の川鶉 (近詠)

春 尽 く (近詠)

雪 嶺 雪欄作家作品鑑賞

ゆ ず り 葉 季音月評

季音「雪」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

現代俳句鑑賞

『水明誌』を繙く

俳誌望見

各賞受賞者の言葉

令和 8 年水 明 賞

令和 8 年季 音 賞

山本鬼之介

町野広子

松井由紀子

染谷風子

檜鼻ことは

石山かつ子
大村節代
大橋廸代
ほか

日高道を
青木鶴城
正木萬蝶
ほか

染谷風子
菅原卓郎
池田珪子
ほか

網野月を

加那屋こあ

梅澤輝翠



令和8年かな女賞

令和8年新珠賞

令和8年鼓笛賞

令和8年山紫賞

新珠賞への意気込み

句集喝采

山本鬼之介

菅原卓郎

水明集

岡本祥子
森下山菜

倉田星歩
ほか

作品鑑賞

水 琴 窟（四月号鑑賞）

風声・水明発展基金御礼

山 紫 集

山紫集作品評

例会報・各地句会報

夏行のご案内・水明塾のお誘い

令和8年 水明全国大会のお知らせ

後記

山本鬼之介

池田雅夫

65

網野月を

76

78・81

86

87

題字…長谷川かな女 表紙…内田恵子 カット…福田千春

勘亭流

山本鬼之介

さくら咲け咲け馬上軍扇高高と

記念日の無疵の空よ揚雲雀

鳥風や模型飛行機急降下

演目の江戸文字きまり風光る
在りし世の天守溶けゐる養花天
シーソーの支点力点山笑ふ
嘗て悪餓鬼かき混ぜてゐる蝌蚪の池
忍法かくや霞隠れと洒落てみる

白頭の川鶉

町野 広子

名作は未完に終る冬夕焼
等間隔に二月の空を過ぐ七機
齒科眼科内科整形二月尽
白頭の川鶉と出会ふ春の川
繕ひし羽根より零る春の水
コンマスの一音に和す春の宵
重ね置くブリキのバケツ万愚節

米軍の指令基地を抱える当地では訓練の為のヘリコプターが頭上を旋回。時には連なる飛行機。それは圧巻でもあり不気味でもある。免許を持たぬ故一駅は歩く距離。電車で三分の所を三十分弱で、往復五千歩以上をひたすら歩く。道を替えて、帰路は川添いを水鳥を眺め、岩に登っている亀を見つける事も。しかしその姿が見えない日は心配したりガツカリしたり。ある日、白頭の川鶉を見掛け、その後も運が良ければ出会えるので楽しみが増えた。一年一度友人と行く演奏会。コンサートマスターの一音に、全員が音合わせをし、演奏会が始まる。陽のある時間帯だけと言う、少し我儘な自分のペースで、日々を生かさせて戴いている。

春 尽 く

松 井 由紀子

もの芽の祈りのかたちよりひらく
初花や幸せさうな散歩道
春コート銀座のひとになりに行く
うろ覚えの唄はララーラ春麗
春の雨あかるき昼を降り止まらず
春尽きて家居に馴染むくらしかな
ポラリスに会はむと北の窓開く

近詠七句に添えて

九十歳を越え初めて入院加療と云ふ経験をしました。そこで遅まきの終活を決意、三年がかりで写真・蔵書やコレクションの大方を手放しアトリエを閉じました。そして三年目の昨年俳句入門以来十二年間の二千余句を整理残った三三〇句を句集にまとめ今年二月に上梓しました。終活は愛着を断つ辛い荒療治ですが一方古びて硬化した身心を過去の緊縛から解き放つ爽快感もありました。残り少ない年月を軽やかに楽しく生きて行きたいと望むとき水明同人のひとりとしてまさにその場が用意されている幸せを心から感謝したいと思います。

雪嶺

季音雪欄作家近詠鑑賞

染谷風子

◇五湖の梅（三月号）

梅林の鳥兔匆匆に荅かな
梅二月音の残りしたたき網
戸袋へ板戸納めて残雪梅
白梅や板一枚の船着き場
船小屋に風を遊ばす梅月夜
梅が香や五湖を絡める花の白
野仏の半眼にある梅の花

鳥羽和風

◇春を待つ（三月号）

先祖から変わらぬ山河初景色
水引のピンと張りたるお正月
真つ新の産着の赤児初日の出
初鴉真澄の空を旋回す
梅ほつぽつ池水に現はる真鯉かな
夕星や梅の小枝へ紛れ込み
白梅の満ちたるところ師の一句

島津初花

三方五湖の湖畔には約七万本の梅林が広がり、春には白梅の香が湖畔に漂う。その若狭三方湖周辺の早春の叙景七句。
一句目、「鳥兔」は太陽と月、転じて歳月、「匆匆」は急ぐ様子。作者は歳月の早い流れの中に梅の荅を發見し、春の到来を知る。漢語を使い格調高く詠む。連作の初句として、心憎い手法だ。二句目、たたき網漁は冬限定の伝統漁法だ。湖面を叩いた残響が湖畔の梅林と響きあう。四句目、觀光船レイククルーズの乗船場の景。白梅の香が小さい棧橋まで漂い、觀光客を歓迎しているかのような。五句目、湖畔の船小屋はかつて梅畑や水田へ行き来する農作業用の舟の格納庫であったそうだが、今は觀光資源のようである。茅葺の合掌造りの船小屋にそよ吹く春の夜風と、梅月夜との取合せは艶やかだ。七句目、半眼の野仏の目蓋の上の梅一輪。仏の多い若狭国の長閑な実景である。正統な句法で格調高く詠んだ七句である。

作者は令和五年のかな女賞受賞者。今回は若狭の新年を言祝ぐ七句を披露。一句目、若狭は古代から朝廷に海産物を献上する御食つ国であった。その千有余年の歴史を誇る山河は瑞祥に満ち作者の心を高揚させる。二句目、赤児の前途洋洋たる未来を祝福する初日の出。今年も吉事が重なりそうだ。四句目、鴉は黒い姿から不気味な鳥とされるが古くから太陽の中の三足鳥や八咫鳥は瑞兆とされ、日光、宮島等の神社では神の使いとされている。その神鳥が真澄の空を旋回している。誠に元旦らしい景である。六句目、梅の古木の透き間に見える夕星。下五の措辞が絶妙である。七句目、鳥羽谷を一望する鳥羽公園の師島津城子氏の句碑を詠む。エッセーによれば、作者は吟剣詩舞道を二十年間続けられ、特に新島裏の「寒梅」の詩舞に力付けられたとのこと。小柄ながら凛とした作者の姿勢も頷ける。「百折耐えて寒梅芳し」である。

◇初地藏（四月号）

山中みどり

潮上り雲を写して冬の川
風にのる団扇太鼓や百合鴉
冬日和明曆墓碑は母娘の名
初地藏善男善女の着ぶくれて
冬うらら破れ幟のお焚き上げ
振舞の甘酒ぬくし初地藏
去年逝きし君の名もあり冬幟

厩橋袂の「厩橋地藏尊」の「初地藏」を詠む。毎月二十四日が地藏菩薩の縁日、その年の最初の縁日の一月二十四日が「初地藏」だ。一句目、満潮で水嵩の増した隅田川。そこに写る白い冬雲。連作の一句目らしい舞台設定だ。二句目、御題目を唱えながらの団扇太鼓を百合鴉も心澄まして聴いている。三句目、明曆三年（一六五七年）正月の明曆の大火は、江戸市街の大半を焼き、当時の人口の四分の一の約十万人の死者を出した、と歴史書は記している。逃げ場を失った多くの人が河岸で犠牲になった。冬の弱々しい日差しが被害者母娘の冥福を祈っている。五句目、地藏堂の周りには、白字で「南無地藏菩薩」と書かれた赤い幟が立てられている。その古い幟に感謝を込めて、浄火で天に帰す「お焚き上げ」の火が穏やかに冬日の中で燃えている。誠に神神しい景である。六句目、婦人部の甘酒等の接待は人情味溢れる下町の一景だ。七句目、昨年三月に逝去されたご主人へのレクイエムである。本所は、関東大震災、東京大空襲でも多くの死者を出した。地藏菩薩による死者救済の伝統の火は今も消えてはいない。

◇新宿（四月号）

境 延昭

新宿通りを春塵の選挙カー
春寒し織江の二丁目この辺り
春の雲御苑の空が狭くなる
天と地下へと伸びる新宿春満月
西口の思い出横丁春の酔ひ
春宵の駅構内に未来地図
安曇野は遥か彼方や夕霞

変化の著しい新宿駅界隈の吟行句。二句目、この句は五木寛之著「青春の門」第二部「自立編」を材にしている。「織江」は主人公伊吹信介の幼馴染の牧織江だ。東京の大学に入学した信介を追って筑豊から上京する。「二丁目」は新宿二丁目、戦前の新宿遊郭跡である。「自立編」は昭和三十年前後のゲルピン学生の生態を生き生きと描写している。皆様にも一読をお勧めする。三句目、新宿御苑は信濃高遠藩主藤家の中屋敷跡である。白い浮雲の流れる春空も心なしか狭くなった様だ。四句目、都庁を始め西口には超高層ビルが多い。ふと仰いだ空に朧月が浮いている。五句目、思い出横丁は細路地の両側に焼鳥屋、もつ焼屋が密集し、昼から飲ませる店も多い。戦後の闇市跡で昭和レトロの安直な飲み屋街である。

激変する駅周辺で昭和から変わらないのは此処とゴールデン街だけだ。昭和の面影に浸って熱帯を堪能する作者の顔が見えてくる。七句目、安曇野は新宿中村屋創業者相馬愛蔵の出身地。愛蔵と妻黒光、愛蔵俊子、動乱の歴史に翻弄された波瀾万丈の生涯に想いを寄せた作者らしい硬派の句である。

ゆずり葉

◆季音四月

檜 鼻 ことは

一刀の隙なき構へ初稽古

石井喜恵

「二刀の隙なき構へ」の措辞が道場の張り詰めた空気を一
気に立ち上げ、凜とした緊張感が読み手の身体感覚にまで迫
ってきます。剣士の新年に臨む厳粛な気持ちと隙のない一
刀の構えが清々しく、読む者の背筋を伸ばします。静の中に張
りつめた動を感じさせる新年に相応しい一句です。

三日目や有無を言はせぬ蜆汁

大橋迪代

日常の一場面を軽やかなユーモアで切り取ったとても魅力
的な一句です。「三日目や」で場面がすつと立ち上がり、い
ったい何の三日目なのだろうと読者の好奇心をくすぐりつつ、
「有無を言はせぬ蜆汁」と、やや強引とも思える手法でその
状況が語られ、三日目の理由が腑に落ちる組み立てが見事
です。

蜆汁は滋養と健康によい食材で、特に疲れや酒の後には良

いのだそう。「有無を言はせぬ」の措辞に、蜆汁の作り手の
やさしさ、作者との親密な人間関係が伝わってくるほのほ
とした温かみのある一句です。

春めくや書架にオーパ!!の撓り竿

松井由紀子

オーパはポルトガル語で驚きを意味する感嘆詞。そして、
巨魚・怪魚を求めて褐色のアマゾンに挑んだ開高健の釣り紀
行のタイトルです。

「春めくや」と、やわらかな春の気配を冒頭に置いたのち、
「書架にオーパ!!の撓り竿」と具体へぐつと寄せる構成が魅
力的です。開高が「オーパ!!」で述べた名魚トクナレや殺し
屋ピラニヤ、黄金の魚ドラドなど、巨魚・怪魚を求めての旅
の記録が、一気に立ち上がってきます。その余韻としての「撓
り竿」が書架に収まっているという取り合わせがお見事。春
めく気配に誘われて、ふと手に取りたくなる一冊、あるいは
再び外へ出たくなる衝動、そうした作者の心の動きがワクワ
クと伝わって来る一句です。

寒の明け天金の書を書棚より

青木鶴城

愛書家でいらっしやるのでしょうか。寒さも緩み、厳しい冬が越えそうな気配のする書齋。天金の書を手に取られる作者の姿にゆったりとした安堵のようなものを感じます。

書籍には、古書、初版本、希少本、美しい装丁本など、その内容を読むだけでなく、紙の香りや手触り、製本技術などを鑑賞するという楽しみがあります。森鷗外「雁」の初版本（復刻版）を目にしたことがあります。表紙は鮮やかな赤の絹張そして天金の装丁が施され、それはそれは見事なものでした。発行所は靱山書店。明治〜大正期に活躍した出版社で、俳句・俳諧書の刊行など近代文学史の中で重要な役割を果たした書店であるようでした。

作者が手にされた書籍は何なのか気になるところであります。寒明けのころ、気に入りの天金の書を取り出す所作には、春へ向かう光と知のぬくもりとが重なりあうようで、作者の静かな喜びが滲むように伝わってくる一句です。

遠き灯は我が家の明り雪野ゆく

横山君夫

「遠き灯は我が家の明り」、その灯りは単なる風景ではなく、帰るべき場所、心の拠り所としての灯りです。続く「雪野ゆ

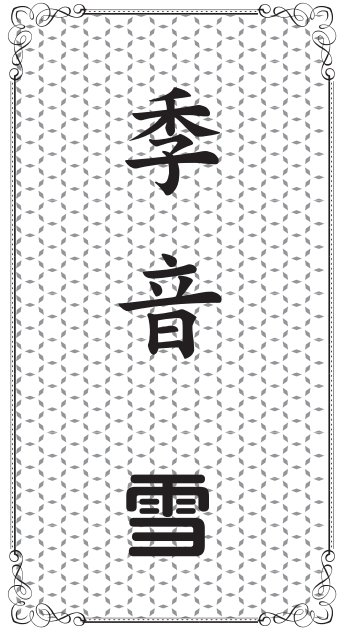
く」により、暗く冷たい雪野を歩く作者の姿が浮かび、辺りの冷気の厳しさと足取りの重さが語られます。無音の雪野において、遠くの灯だけが確かな方向と温もりを示す存在となり、その両義が美しく交差し、帰路の情感をしみじみと描いた一句です。

子ども食堂窓いつばいに冬夕焼

西幅公子

子ども食堂は全国に広がり、その数は一万二千箇所にのぼるそうです。数年前、「全国子ども食堂支援センター・むすびえ」の理事長をされていた湯浅誠氏の講演を聞く機会がありました。氏は「子ども食堂は、食事ができない子どもたちだけが集う場所ではなく、地域の様々な人たちが誰でも行ける場所、行きたいときに行けるみんなの居場所。そうした場所があることで、地域の人たちが繋がりを持つことができ、困っている人たちに手を差し伸べることができる」と子ども食堂への思いを語られていました。

句は、「子ども食堂」と具体的な場を据え、社会の温もりや人の営みを背景に、「窓いつばいに冬夕焼」と続けることで、外の冷えきった世界とは対照的に、室内には人の気配やぬくもりが満ちていることを暗示しています。地域の人たちが支え合う子ども食堂の明るさが、夕焼の色と重なり深く胸に届いてきます。



朝 櫻 大橋 廸代

蓬生や雨後のふるへの雲雀の子
舞ひ鳴きの雲雀きこゆは乙子のみ
父母亡くて背戸の鶯たけなはに
独り占む本丸跡の朝櫻
お天守や息ととのへて花の雲

その奥に 石山 かつ子

エープリルフル 大村 節代

少年の声は大人に燕来る
にぎにぎしジャズのスィング楓芽吹く
軒深き母屋と納屋や燕来る
その奥に精霊在す春障子
春障子揃ふ縁者の声弾む

城跡に砲台跡に名の木の芽
見上ぐれば大吊橋よ蓬摘む
春灯し小さき壺に少女の絵
亡き父とダンスを踊る万愚節
床の間にミロのヴィーナス万愚節

夜 桜 菊池 ひろこ

「押忍」の檄 境 延 昭

夜桜や堀の内なる釣瓶音
流水の接岸へ駅灯りけり
窓の辺で詩語入れ替ふる木の芽時
木の芽時乾きがちなる木木の幹
春雨の農場で売る山羊の乳

大石忌番長飛ばす「押忍」の檄
声がして鳥の影散る春障子
礼服のタイの白黒つばめ来る
春の海潜水艦は似合はない
初燕奥で電話が鳴つてゐる

惜 春 賦 五明 昇

うららかや 島津初花

漕ぎ出せし舟のさ迷ふ春炬燵
去り難き古き茶房や春灯
愚に生きて愚者には非ず万愚節
国旗市旗校旗へんぼん入学式
ビル街に読点を打つ花水木

陽炎や路上を走る仮免許
春の風新車の窓を全開し
春惜しむ筈で帰る寺の鐘
うららかや谷に解れし鶴
麗かに園児の列の間延びかな

櫻の夜 鈴木康世

花の雨傘傾げして会釈して
酒を愛し旅を愛して花に逝く
忌を修し枝垂桜の中に入る
持ち古りし歳時記を繰る櫻の夜
撞く鐘の静かな余韻鳥雲に

さくら 十倉和子

初花やいそいと立つ朝厨
大寺に飼はれて孔雀さくら冷え
さくらさくら輪になつて打つタンバリン
花の雲はるけきひと日よみがへる
花の下わが身だんだん透明に

微風 鳥羽和風

微風に乘る嬉しさよ更衣
「好き」「嫌い」占ふ果てのマーガレット
大仏の体内潜る薄暑かな
マーガレットいとし盛りの姉妹
五月闇鳥鳴きして葬ひとつ

女形 永野史代

エイプリルフル女形もつとも女形らし
騙されても騙されなくとも万愚節
草に寝て初蝶空へ消えゆけり
晩酌は何をおいても父は独活
初蝶のたよりなき羽ひらひらと

再 会 星野和葉

放たるる稚魚くねくねと雪解光
啓蟄や本くづれ落つ書棚より
四月馬鹿造花のはずが萎れをる
春満月我が狭庭にも罷り出づ
再会の握手は固し春の月

道 の 駅 町野広子

初蝶ふはり小川を越ゆる野菜畑
山を背の小さな漁村初蝶来
成程と妙な納得四月馬鹿
山独活二本迷はず求む道の駅
独活買うて母がしてゐたやう料る

春 の 蝶 松井由紀子

迷ひなく先づ大空へ羽化の蝶
牛一頭蝶も一頭風笑ふ
白蝶に遊ばれてゐる牛の耳
反芻の牛の背を借る蝶の昼
一輪の鉢へ蝶影昼ふかく

春 が 行 く 茂木和子

ときめきは今も四つ葉のクローバー
しばらくは鳥語楽しむ花回廊
川風や鯉のあやつる花筏
掌を握り肩抱き合うて春惜しむ
リハビリの柔軟体操春蚊出づ

「太極拳」 森川義子

しなやかに春風を押す太極拳
鳥帰る湖に別れの影曳きて
堂塔の薄ら見ゆる遠霞
故郷は母の香りや春障子
春の陽も丸め洗濯物たたむ

花曇り 森本早苗

湯煙のまつたり昇る花曇
薔薇の芽の真つ赤に貫ふ明日の夢
花万朶平和な国に生まれ来て
囀りや婦人ピイチク長電話
高らかな雄鶏の声ミモザ咲く

花見舟 山中みどり

墨堤の桜に集ふ屋形船
晴れやかに人の行き交ふ花の土手
餌をねだる鷗を連れて花見舟
江戸前の沙魚の天ぷら花見舟
潮止まる大川に白き花筏

櫻さくら 網野月を

世に咲けよわが心にも初櫻
ここに樹つ宣言のやう櫻咲く
花色に咲き花いろに散る櫻
さくらさくら私の胸に万華鏡
橋で迎へ橋で見送る花筏

紡ぐ 石井喜恵

蒼天に桜の紡ぐ江戸小紋
 逢へぬ人に花は朧となりにけり
 日のゆるみ風のゆるみや春の川
 ちりぢりの蝌蚪に水曲みわたの隠れ場所
 山独活や行つたばかりの里のバス

☆ ☆

最近の名句集を探る

大西 朋

座談会

池田瑠那『心柱』
 庄田ひろふみ『聖河』
 西生ゆかり『パブリック』

司会 筑紫磐井
 内村恭子
 山田耕司

高橋睦郎特別作品40句

●今月の華

藤井稜雨／三宅やよい

●好評連載

伊野孝行

人はなぜ風景を描くのか

●巻頭三句

井上康明／田中亜美

岩田 奎／稲田眸子

矢島玲子／田中由子

吉川千早

俳壇ランドスケープ

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西 朋

俳句へのまなざし

橋本喜夫

俳句のレトリック

藤村公洋

俳句のつまみ

神作研一

てのひらの江戸

― 古典籍を旅する

穂矢まりえ

諸家書架

石井隆司

たもとほる

俳句よもやま話

山本 潔

一望百里

●作品16句
 浅井陽子／江崎紀和子
 手拝裕任／福田若之
 矢須恵由

俳句四季
 Haiku Shiki

2026年6月号

5月20日発売
 定価1300円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音月

不易 日高道を

さまざまな花を揃へて利休の忌
佐保姫や野山は色を刻刻と
白鳥帰る自由な空を手土産品に
山焼きて悲しきまでの雉子の声
必滅のことはり重し涅槃の日

春の景 正木萬蝶

鳥雲に地図も海図も頭の中に
初蝶来をとこやもめの昼下り
歩き出す白衣観音春の宵
彼に棲むジキルとハイド春の宵
花影に揺るる青海波の袂

春の水 青木鶴城

せせらぎや蝶の羽音に誘はれて
目覚むれば旅の水音おぼろ月
佐保姫やゆるり過ぎゆく櫂の音
憎しみの溶くる奇跡や春の水
蹲踞におもかげ宿し鳥帰る

風遊ぶ 曲淵徹雄

佐保姫のついと一掃き秋津島
入日影ふらここ漕ぐは風ばかり
ちんまりと青饅を盛る柿右衛門
蒼天をゆする輝き白木蓮
目で撫づる神木の傷春の雪

春筥 檜鼻ことは

二月尽聞かねば済みしことひとつ
隣より目出度き知らせ露の臺
伝へ聞く比丘尼の話白椿
雛納め白寿の歳に逝きし伯母
ときめきて春筥の薄造り

初つばめ 原田 秀子

創造の神に脱帽 蝌蚪の紐
少しだけ小顔に見せて春シヨール
初つばめラマルチーヌの像掠め
瑞垣を躲して飛ぶや初つばめ
神楽殿一督投げて初つばめ

鳥曇 大場 順子

神獸鏡に写せば朧おのが顔
袖の渡りに義経しのぶ朧かな
鳥雲渚に拾ふ虚貝
シルクロードを地図になぞるや鳥曇
たまゆらの雨滴こぼして朝桜

美学 梅澤 佐江

切り貼りの花の浮き立つ春障子
肩掠め水の匂ひの朝燕
閃光の走るが如し初燕
山独活の潔き香よ齒応よ
散り際の美学は流石桜かな

無国籍 丸山 マスミ

公園の河馬の口より春の声
散る花のひらりひとひら波に乗る
春服のマネキンなべて無国籍
言葉少なく交はす盃春の宵
城攻めの悲話の空堀菜種梅雨

終着駅 近藤 徹平

群燕終着駅の転車台
濁声の演歌が通る春障子
つばくらめ儀装馬車には燕尾服
春障子今も軟派の老四人
霸王の戯るる一天地六春疾風

風雲児 内田 恵子

告天子馬に乗る風雲児
万愚節見たか宙飛ぶ馬二頭
四月馬鹿豆腐の角で指に傷
雪代山女アンモナイトの菊花石
ドローンを武器とはするな揚雲雀

陽炎 松宮保人

鐘樓の五打聞きをれば涅槃雪
脚病みぬ母に伝へし初桜
陽炎やなよなよ路傍の石仏
出不精の居留守を使ふ春炬燵
行く春や母の忌日の過ぎて行く

春の息吹 河野はるみ

水源池の水こんこんと八重桜
白壁に芽柳映し通ひ舟
蕉翁の句碑に寄り添ふ更紗木瓜
花冷やポッケにそつと組し手をつ
ばくろや尻尾でサイン雨あがる

聖五月 池田雅夫

陽光の普く山河聖五月
夏めくや竿いつぱいの洗ひ物
胸元の白き柔肌更衣
山壁の幾重ともなく夏霞
薔薇一輪剪るには惜しき剪らでをく

ギロチン窓 石川理恵

初蝶の輕輕越ゆる県境
肥後守で削る鉛筆春うらら
外つ国に住む子へ文を鳥曇
竜馬像の遠き眼差し鳥曇
洋館にギロチン窓や鳥曇

さくら 大塚茂子

辛夷の芽大きく息を吸つてをり
咲き満ちて風は饒舌唄ふ花
鳥は枝人はベンチに夕桜
ミモザ咲きサラダの上に炒り玉子
雨後の庭光る産剃解く椿

慰霊の旅 原田自然

父眠る熱帯の地や春彼岸
春空に舞ひたる友情紙風船
万感に濡らす枕や春の夜
ミヤンマーに出会ひ別れの春彼岸
春サラダに寄り来し成田の探知犬

雲雀野 荒井 俱子

春泥を脱し会話の戻りたる
雲雀野に塞ぎの虫を解き放つ
化野に続く農道揚雲雀
蔵街の旧き家並や夕つばめ
仙石線傾ぎて春の海せまる

波頭 福田 千春

雁風呂を焚きて鎮むる波頭
脱ぎすてし衣のぬくもり春の宵
春の夕小指でなぞる紅淡し
少年にうつすらと髭蝌蚪に足
どの子にも未来がありて蝌蚪に足

春の土 飛永 鼓

深眠り覚めて歓喜の春の土
貪りて光を孕む春の土
春の土光を孕み目覚めをり
待ち人を待ちあるやうな春の土
柔らかき乙女の肌や春の土

旅終へて 田中 章嘉

早々と古巢に燕羽休め
旅終へて秩父札所のつばくらめ
海風に向ふ椿の落ちまいと
桜咲く長閑な時間眼を閉ぢて
五百羅漢桜吹雪に笑む一日

花見 松山 清子

転勤の便り桜の開花の日
メールにて合格通知初桜
墨堤の大橋くぐる花見船
小橋の上に縁台の出る花見どき
手を広げ走り出す吾子花吹雪

さへづり 西浦 千枝子

さへづりに心奪はれ歩を延ばす
散る花をひろひ集むる小さき手
山桜溪をへだてて競ひ合ふ
婆三人笑ひころげる花の下
百合咲きて心おきなく御裾分け

カタクリ祭

野口和子

村あげて守るカタクリ祭かな
蛇出でて全身総毛立ちにけり
花菜畑摘みとる背なの五六人
赤飯を買ひて帰りし春の街
坂登りきればどん詰まりミモザかな

☆

☆

永久保存版周年記念特集

蛇笏賞の60年

巻頭作品50句 一 小川軽舟
作品21句 一 今井聖・小林貴子

俳句

6月号 予告

5月25日発売

予価1,300円(本体1,182円)®

●蛇笏賞クロニクル―歴代句集の代表作はこれだ！

西村麒麟・津川絵理子・瀬間陽子・
堀本裕樹・高田正子・関悦史

●受賞を逃した名俳人

守・屋明俊・上田日差子・丹羽真一

●特別寄稿 筑紫磐井「直近10年の受賞作とこれから」

●蛇笏賞トリビア……編集部編

第60回 蛇笏賞発表！

●受賞のことは ●自選50抄

●選考委員選評 高橋睦郎・中村和弘・

高野ムツオ・正木ゆう子

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！

電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

季音花

伊勢の海

染谷風子

天と地を蹴りて勇悠半仙戯
 利休忌や北の新地に小糠雨
 春炬燵かつて茶の間に「宮田輝」
 艦橋に並ぶ水兵群燕
 飛花落花神風響む伊勢の海

三月

池田珪子

つぶれをる経木の中の桜餅
 偲ぶこと思ひ出すこと草団子
 参道の小さき老舗の蕨餅
 焙烙のあられの爆ずる雛の宵
 雛供養炎の中の母の文字

春極まる

菅原卓郎

紙吹雪舞ふおぼろ夜の旅一座
 花売りの過る町家や春障子
 芝青むバス停遠き異人墓地
 落縁に猫の転た寝なたね梅雨
 渡り瀬に腹ひけらかす小鮎かな

終の住処

渋谷きいち

山桜終の住処はログハウス
 茅葺の駅舎の屋根に散る桜
 ソムリエの抜栓メルロー春の宵
 白さぎの飛び立つあとの苗代田
 桜鯛背に大きなランドセル

爺のひとりごと

梅澤輝翠

引き波のあぶくの中に桜貝
 荒東風に網継ぐ爺のひとりごと
 閉校なれど前途洋洋卒業す
 入学や遠洋漁業の父帰る
 花冷や手にはホットな缶コーヒー

燕来る 越田栄子

初燕清き流れの和紙の里
待たせたね只今参上初燕
初燕来てより里の賑やかに
煉瓦煙突かすめて迅きつばくらめ
酒蔵の杉玉青し燕来る

産声 保坂翔太

鶏鳴の一際高し寒の明
雪形の輝く村へ新教師
金縷梅や山路五キ口を登校す
麗かや雨後の茅葺屋根の湯気
春暁や産声高き助産院

筑波山 横山君夫

春野ゆく湖の輝き見ゆるまで
秩父路の太古は海よ土筆つむ
春暁の紫雲たなびく筑波山
春暁の街灯すでに灯の淡し
夕刊のすみずみ読みて遅日かな

ひばり野 笹本啓子

ひばり野に転がつて居る子等の声
草の芽に大地の息吹もらひけり
菜の花や園にそちこち豆画伯
春暁に目覚め五体を整へり
ニュータウンの街区をしきる花水木

入学児 新曆文

振り向きて母を目で追ふ入学児
背に余る鞆も揺るる入学児
煩惱のたがゆるびたり春の宵
苔むしたる地蔵に吹雪く山桜
苗代に実り良かれと祈るかな

シャボン玉 清水桂子

梅の香を台無しにして焼団子
ありし日の「草原情歌」春うらら
飛び交ふ影を飽かず見てゐる春障子
春の洋上航跡白く進む船
世が世ならと法螺吹く叔父やシャボン玉

計 報

石田慶子

おぼろ夜の内内と言ふ耳打ち
ほろ酔ひのコロツケ一つ春の闇
廃校の桜見にゆく三世代
春の水母の実家の墓仕舞
訃報来る肩先ぬらす花の雨

飛花落花

下川光子

弁当の粕漬に酔ふ花筵
グランドのかけ声揃ひ飛花落花
下駄箱に長靴並ぶ入学式
蝶生る闕伽桶の水だぶだぶと
優しさに傷つくこともリラの雨

わらべ地蔵

鈴木玲子

小走りに小粋なをんな春ともし
わらべ地蔵のただ寄り添ひて春の闇
灯の洩るる部屋にイーゼル春の闇
留まるを知らぬ初蝶横丁へ
初蝶や心に微風残しゆく

飛花落花

宮崎チアキ

長老の豊富な話春炬燵
松の葉に花開くやう春の雨
春雨の滴るままに地の湿り
花冷や天寿全ふ師の笑顔
吹つ切れぬ思ひを残し飛花落花

春のロマン

山岸久美子

昇る陽の光和らぐ春障子
路地入れば辛夷の木立香を放つ
春雨にチェロの音和すや心沁む
春雨の街の明かりにロマン満つ
天空に木の芽さざめく大櫻

神戸の街

野村美子

いにしへの勿来関や風光る
ものの芽に生きる幸せ今朝のお茶
筏場の清流育ち山葵漬
春光や神戸の街の洋瓦
皆優し春を告げゆく鳥の声

春景さまざま

寺内洋子

春星やことばの棘の抜けぬまま
春雨や三条河原のふたり連れ
しやぼん玉に乗りて赤児の笑ひ声
子育てか恋か鳩鳴く春うらら
本読むに四季は問はざり春の宵

春の雪

山戸美子

スコップは不要と言はれ春の雪
玄関に小さき達磨や春の雪
カフエラテの泡を崩して春の雪
帰国子の飛躍新たに卒業式
花時や祝に飛驒の髪飾り

春泥

森和子

春泥の豹柄つけてけんけんば
春泥に歩板敷かるる下校時
春泥を男チャップリン歩きして
花筏押しては崩す鯉の長
花の雨鎮もる寺の無縁塚

名草の芽

西幅公子

合掌の楚楚たる姿名草の芽
旅立ちを告ぐる羽撃き鴨帰る
若緑天をめざしてこぞり立つ
独活の香に飛んで行きたい野山かな
空いちめん幸せの色白木蓮

実りの日

綿貫ひさの

苗札やいそいと待つ実りの日
年年に思ひ異なる桜かな
風光る櫛並木の学バス路
松の根の鉢底抜けて緑立つ
母の忌やひとり旅して春惜しむ

春の寺

高橋満耶子

手を打つや鳴き籠ひびく春の寺
半時も身動きならぬ春の闇
足枕を少し手直し目借時
通学は新自転車や橋うらら
桜茶屋ワイングラスに逆さ富士

桜 葛城 千世子

花時 雨缶とビン出す子供傘
河津桜黒ランドセル背負つてみる
潦の河津桜へシヤッター音
紅枝垂はなみくじ引き三分咲き
ライトアップしだれ桜の面々と

草の芽 野平 美紗子

狭庭にも草の芽確と伸び始む
梅の木の下にほんのり名草の芽
庭先の小岩のければ草の芽が
亡き夫の里より届く山葵漬
春の海「今切」の先太平洋

花の國たのし 佐々木 史女

菫にはすみれの吐息活断層
風そよぐ田島ヶ原の桜草
霞草紙人形も二重帯
海棠に乙女の朝や素颜立つ
水いろに夜明けの空や鉄線花

特別企画 俳人と寺 巻頭作品10句 池田澄子・梶谷予人・藁目良雨 行方克巳・水上孤城・中西夕紀 三村純也・和田華凜	特集 わが家の台所季語
	四季巡詠33句「第V期」……川井城子・佐怒賀直美 風の旋律……尾池和夫 セピア写真館……手拝裕任 編集室の風景……沖俳句会 谷川俊太郎俳句嬉遊……正津勉 季語を考える……仁平勝 旧派の俳句……秋尾敏 二度目の俳句入門……長谷川權 今月の句……煌星俳句会 俳句と随想12か月 波戸岡 旭・吉田千嘉子
<h1>俳壇</h1> <h2>6月号</h2> <p>5月14日発売 定価1000円(税込)</p> <p>巻頭エッセイ 岡安紀元</p> <p>八木健選 滑稽俳壇</p>	
本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03(3294)7068 振替00100-5-164430	

現代俳句鑑賞

網野月を

小夜時雨語尾を聞き洩らすには十分な

対馬康子

〔俳壇〕3月号・春風より〕

「小夜時雨」の雨音が話の語尾をかき消していると鑑賞した。「十分な」とあるのでこの「時雨」は突然にバラッと降り出して、雨音は相応に大きかったのであろう。上五の「小夜時雨」が強調されていて、次いで句の下半分が口語の表現になっている構成は、作者の雨音を知覚する経過がそのままに表現されている。雨音の音量だけではなく、注意力が会話よりも「時雨」の方に向いたということでもある。他に「踵が地面を閉じ歩く春風」がある。

寒林をゆく後手のベートルヴェン

西村睦子

〔俳壇〕3月号・カーデイガンより〕

ベートルヴェンは引越魔であった。ウィーンには数十か所、彼の住み暮らした住居が確認されている。その中でもウィーンの北の方の地区のハイリゲンシュタットには今でも記念館などとしてその住居が数か所保存されている。ハイリゲンシュタットにはベートルヴェンの小径、ベートルヴェンの散歩道などの名称が残されていて、将に後ろ手のベートルヴェン

が想起される。「後手のベートルヴェン」には「寒林」が似合っている。他に「カーデイガン羽織り出を待つピアニスト」がある。

フクシマの牛の泪よ雪ばんば

山岸修児

〔俳壇〕3月号・カレの市民より〕

上五の「フクシマ」の片仮名書きは、筆者に「ヒロシマ」を惹起させた。多分、作者の意図もそこにあるのである。この片仮名表記は、重い表現なのである。他に「聖者めく「カレ」の市民」冬の月」がある。

薄氷をなぞりてふつと越ゆる水

山西雅子

〔俳壇〕3月号・結社の声より〕

「薄氷」の融けゆく過程での「薄氷」の浮かぶ水面の様態を描出していると鑑賞した。「薄氷」と水面との間には、時として気泡があつたりもするのだが、氷の割れ目から水があふれだしたりもする。氷と水は同じものであり、また異なるものであることを改めて教えられたようである。

団子屋で二回も休む絵双六

伊藤左知子

〔俳句四季〕3月号・ヒーローのある世界より〕

「団子屋」が描かれている「絵双六」を筆者は不勉強で知らないが、旅を模した双六であろうから、「団子屋」でお休みの趣向も肯けるのである。正月の楽しい気分がそのままに伝わってくる。他に「年新たヒーローのある世界線」がある。

爪先も踵も二つ春を待つ

渡辺誠一郎

〔俳句〕3月号・斯く斯くより

上五中七の「爪先も踵も二つ」は人類を指しているのである。その人類は、「春を待つ」っているのである。待春の気分を共通に持っているというのである。作者ご自身のことと限定的な鑑賞も成立するし、またもう少し広く二足歩行の動物まで広げて良いかも知れない。他に「斯く斯くと古根を外す桜守」がある。

並行宇宙あり昼顔の花の奥

池田瑠那

〔俳句〕3月号・『心柱』自選30句より

「並行宇宙」とはいわゆるパラレルワールドのことである。実際に私たちが認知する世界・宇宙とは別に存在する世界・宇宙のことである。その別途に存在するであろう宇宙が「昼顔の花の奥」にあるというのである。マクロコスモスの彼方に存在するのではなくて、「花の奥」というミクロコスモスに存在するということである。「花の奥」に見入ると吸い込まれそうになるのは、もしかしたらその所為なのであろう。他に「爽秋や斬目しるく心柱」がある。

猪口も螺鈿もちいさな祖母のお元日

瀬間陽子

〔俳句〕3月号・武蔵野より

「猪口も螺鈿も」の「螺鈿」は愛用の箸か、それとも器であるうか。句中に情報はないが、食事の時に使用する器か道具であろうと想像する。お婆様の愛用する正月の器と道具を叙述することで、作者のお婆様への愛情の深みが詠まれていると感ずる。「ちいさな」は大小のことだけではなくて、美辞のような働きをしている。他に「武蔵野のさざんかのルビ掠れたる」がある。

鉛筆を尖らせ一句紫黄の忌

小倉倭子

黄落や忘却したきこと数多

旅好きの彼の影みる秋の月

〔遺句集「いくたびもどこまでも」より〕

遺句集「いくたびもどこまでも」は三月二十日に発刊されている。句集『帰心』は二〇二三年発刊であるから、それ以後の句を纏めたものである。第一句目は長く作者が師と仰いでいた山本紫黄のことを詠んでいる。師匠紫黄から学んだ俳句に対する真摯な姿勢を「鉛筆を尖らせ」に託していると思われる。彼女の師匠への思慕はある種の恋愛にも似た一途なものであったように思う。第二句目は、作者の晩年の思いの一面を明確に描出していると思われる。上五の季語「黄落」に充実した俳句人生を託していると考えたい。第三句目は澤好摩のことを追憶する句であらう。この句の前には「七夕竹とりでどこに好摩さん」の句があり、後には「芒野に好摩が溺れる詩の風」の句があるからである。

『水明誌』を繙く（水明三月号）

加那屋こゑ（「鬩」軸）
（「墨BOKU」所属）

老いて尚サンタ来るかと夢に入る 嶋田洋子

子供がサンタクロースをいつまで信じているかは、家庭によつてさまざまだろう。私の場合、近所の友達に「君んちのお父さん、屋根に上つてプレゼントを置いてたよ。」と告げられ、シヨックを受けた。それでもサンタの正体が父だと分かつた後も、「サンタさんへ」と欲しい物を書き連ねた手紙を母に渡していたのだから、子供とはちやつかりしている。我が家ではサンタは父であり、母にとつては夫であつた。多くの家庭が、そうした役割を演じているのだろう。

しかし子供が巣立てば、プレゼントを用意することも、ご馳走を作ることもなくなる。老いて迎えるクリスマスには、どこか寂しさが漂う。一日の終わり、ベッドの中であつての賑やかな時間を思い出しながら眠りにつく。子供たちの笑顔、若かつた夫、我が家のサンタ。夢の中でもう一度会えたら――そんな願いが滲む句のように思われる。

目覚めて枕元にプレゼントがある朝とは、よく考えてみると家族や親の愛情あつてからこそ。「老いて尚」のあとに優しい夢の世界へ誘われ、余韻のあたたかな一句となつている。

かつ井におまけのビスコ冬日和 石井妙子

ビスコは昭和八年に発売されて以来、百年近く販売されているビスケット菓子。乳酸菌入りでやさしい味わいは、子供から大人まで幅広く愛されている。赤いパッケージの「ビスコ坊や」の笑顔も印象的だ。

そのビスコがかつ井のおまけについているという。チェーン店では考えにくく、おそらく個人経営の蕎麦屋とか定食屋だろう。食後のデザートとしてはちよつとパサパサしているが、甘味があると何となく嬉しい。

再開発で無くなつてしまった地元の豚カツ屋でも、いつも食後に小さなアイスや果物を出してくれたことを思い出す。下町の女将らしい飾り気のないサービスだつた。そんな感じが出てきたビスコ。食後のお茶と共に口に含む。外は穏やかな冬日和。これから職場に戻つて午後も仕事を頑張ろう、満足と温かな日差しが心に余裕を与えてくれる。

味覚や色彩の描写に加え、句中のD音とB音が軽やかなリズムを生み、音感も楽しい。作者は日常から小さな幸せを見つけるのが上手な人だと思つた。

俳誌望見 梅澤輝翠

「草炎」

令和八年三月号 通巻 三八八号
主宰 久行保徳 発行所 山口県周南市

昭和二四年四月 大中祥生が周南市で創刊 師系大中祥生

「庶民の哀歓を現代の批評精神で捉える」を継承 隔月

表紙は可憐な犬ふぐりの写真、その中に主宰の一句

一 駅を越せば尾鰭の犬ふぐり

戸田駅で降りる筈だったのに「次は富海」に飛びあがった二人、夢中になって話して、ちよつと尾鰭が付いて、でも愛すべき本音の話だったような、まるで犬ふぐりの空色の花のような、もう確かめる術もない、あの人は幾つもの駅を乗り越して青い空へ行ってしまったもの（片山涼子）

主宰句 冬檸檬 七句より三句

黄の眩し冬の檸檬を握りしむ

檸檬といえばかの小説が思い浮かぶか。しかしこの檸檬は冬のモノトーンに近い冷たい景色の中で眩しく輝いている檸檬、夢や希望が湧いてきて思わず握りしめてしまった。

鏡中 は 自在に自由 小六月

鏡中という言葉は古来から「あちらの世界」神秘的なイメ

ージがつきまといます。小春日の穏やかさに誘われて鏡に映っている自分の表情が現実の自分より自由にみえたのでしょうか。

煮大根たらふく盛って金曜日

寒い季節の煮大根最高においしい。それをたらふく盛ったんです。器は大根が映える織部、それとも萩、志野、たらふく盛るととてもうれしく楽しい。そして金曜日なおの事。

折々のうた 久行保徳 推薦

草炎集一〇六名より三句

柘榴割れ耕畝の妻の生家かな 吉村哲郎

パラバラと丸薬いくつ撥ねて冬 黒田斗志子

湯豆腐の豆腐に臍のなき時代 玉木愛子

海溝集（同人作品）六七名より三句

喃語には喃語で応ず小春かな 赤坂満子

晩秋の街ゆく人の影を踏む 石川芳己

菊日和昭和の部屋に招かれる 岩城みくら

ジュニアの部 中一〜高一 四九名より三句

風幽か肩に落ちたる紅葉かな 中2 江崎真史

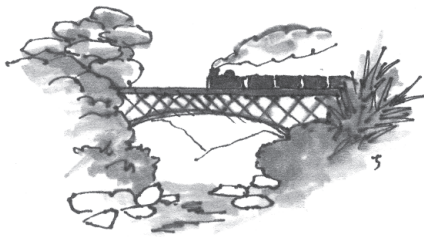
悲しみを全て甘藷にぶつけたる 中2 石飛陽菜

毛布かけ母のお腹にいるごとし 中1 木下愛結

小さな詩人達の投句も多く、心を磨き豊かな感受性を育てていって欲しいと若者への力強いメッセージを感じました。

各賞受賞者の言葉

新珠賞選考委員長
選考委員の評



水明賞 小林京子



〔略歴〕昭和二十九年埼玉県生。
令和三年水明入会。令和四年同
人。令和五年新珠賞受賞。
第一例会、若松例会、蕪の会、
円卓の会、若楠句会。
現代俳句協会会員。

受賞のことば

この度は「水明賞」と言う由緒ある結社賞を頂くこととなり誠に光栄に存じます。山本鬼之介主宰はじめ、選考委員の方々に心より御礼申し上げます。

俳句に全く無縁であった私でしたが、コロナ禍に「別所沼・初めての俳句教室」が会合でした。それ以来、山本鬼之介主宰、網野月を副主宰のご指導のもと、諸先輩、句友の方々の励ましや交流があつてこそ、これまで継続できたことに改めて感謝申し上げます。

昨年春に母を亡くしましたが、俳句に没頭することが精神的支えとなりました。また、母がその昔、一時俳句に關わっていたと思われる遺品が見つかったのは驚きでした。

受賞したからと言って急に俳句が上手くなる訳ではなく、気持ち新たに俳句に取り組んでまいりたいと思います。

水明俳句会の皆様の変わらぬご指導とご交流をお願い申し上げます。

▼受賞対象句抄

秋の蝶砂丘の空へ吹かれ行く
百年の土間こそ我が家残る虫
竹林の蕭蕭として時雨けり
初富士や明日は箱根へ勝ちに行く
雪時雨傘を傾げてすれちがふ
行く春や母に青春時代あり
烏賊釣火また一つ消ゆ能登の海
蜘蛛の囿の破れ山河の風が抜く
本郷に残る旅館の作り滝
秋扇持つ仕草佳き京男

水明賞

菅原真理



受賞のことば

この度は令和八年度水明賞を頂きまして誠にありがとうございます。山本鬼之介主宰を初め選考委員の皆様にご心よりお礼申し上げます。

世の中に素敵な言葉が数多ある中で、私は今自分らしい自分だけの言葉はないか探す日々です。それが見つかった時の喜びはひとしおです。

最近脚の筋肉を痛めてしまい、以前のように出歩くことが少なくなりました。早く治して青い空、黄色の花菜、蝶等に出会いたいです。

まだまだ未熟な私ですが、主宰初め諸先生方、先輩句友の皆様へ感謝して、これからも尚一層精進して行きたいと思っております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

▼受賞対象句抄

裸婦像や春風まとふ幾重にも
春障子明日の式服ある長押
まだ遠き音のうねりや春の雷
夏霞見知らぬ街に迷ひ込み
蝸牛ゆるり進めば海の見ゆ
梅雨茸恨み節でもうなりさう
坂道を下れば秋の日本海
句だけ残して暮るる刈田かな
無彩色の夕べに溶くる寒鴉
円窓はしぐれて色のなき季に

水明賞 岡田宣子



受賞のことば

この度は令和八年度水明賞を賜り、誠にありがとうございます。山本鬼之介主宰、網野月を副主宰、選考委員の皆様にご心より御礼申し上げます。昨年の新珠賞に引き続きの思い掛けない受賞に驚き、嬉しさと感謝の気持ちで一杯です。

思い返せば七十歳を目前にして、人生百年と言われ始めた頃で余生は何をしようかと模索していた時、六十九歳で亡くなった父が長年俳句を嗜んでいた事に気付き、俳句の俳も分らないけれど勉強してみようと「はじめての俳句教室」に参加したのです。全くの初心者にウエルカムで迎えて頂き、歴史ある水明の同人になり、このような栄えある賞を頂けるまでに……。これも偏に主宰、副主宰、諸先輩、句友の皆様のご指導の賜物と存じます。

この受賞を励みに益々精進して参りますので、今後ともご指導の程宜しくお願い申し上げます。

▼受賞対象句抄

秋澄むや枯山水の磔の波
つがひ鶴鶴一声交はし翔びたてり
蒼天へ鶴唳発し翔び立てり
格子戸の奥の暗さや春浅し
島の風はらみ椿の咲き溢る
津軽富士望み城下は桜どき
春灯に浮かぶ坪庭京の宿
新緑の杜の深さを奥社へと
山間の一村包む天の川
境内の風受け庫裡の唐辛子

季音賞 保坂翔太



受賞のことば

三月十日朝、鬼之介主宰より「季音賞、おめでとうございます。」とお電話をいただきました。「有り難うございます。」という言葉を繰り返して述べさせていただきました。令和四年に水明賞をいただきました折り、「もつと上手になりたい」という思いがありました。今でもその思いを持ち続けております。

私の作句信条を問われれば、「俳句は、日常生活の中から湧き出るものであり、感動を素直に詠み、その足跡を辿れば、自ずと自分の作風が見えてくる。作風が変わる時もある。それも又よし。」と答えるようにしています。この考え方に達した時、ほんとうに俳句を楽しめるようになりました。

この受賞を糧に、「俳句がもつと上手になりたい」という志を胸に、さらに精進したいと思います。山本鬼之介主宰、網野月を副主宰はじめ、諸先輩、句友の皆様、今後とも、ご指導、ご鞭撻の程を宜しくお願い申し上げます。

▼受賞対象句抄

樽酒に木槌の一打初明り
回峰行真似て小走り枯木山
微動する岩陰の魚冬終はる
校門くぐる少年の意気風光る
播州弁で仇を討ちしや大石忌
桜まじ江戸の名残の常夜灯
黒南風や朽ち行く沖の軍艦島
晩照の島へと泳ぎゆく少年
砂子路の彼方の島や秋の雲
抜け殻となりし集落藪からし

季音賞

横山君夫



受賞のことば

この度は、「季音賞」という荣誉ある賞を頂く事となり、誠にありがとうございます。

思いがけず身に余る高い評価を頂き、大変嬉しく思います。これも偏に、りんどう俳句会で直々にご指導頂いている山本鬼之介主宰、並びに句会メンバーの皆様のお蔭であり、心から厚く御礼申し上げます。

この受賞を機に、改めてこれまでの俳句人生を振り返り、ご指導頂いた諸先生方並びに多くの先輩、句友の方々に感謝しつつ、次のステージに臨みたいと思っております。

私も既に八十年代半ばを過ぎました。ゆっくりとではあります。私に既に八十年代半ばを過ぎました。ゆっくりとではあります。私に既に八十年代半ばを過ぎました。ゆっくりとではあります。私に既に八十年代半ばを過ぎました。ゆっくりとではあります。

今後とも皆様のご指導の程よろしくお願い申し上げます。末筆ではございますが、選考委員会の皆様にご厚く御礼申し上げます。

本当にありがとうございます。

〔略歴〕昭和十五年富山県生。

上尾市在住。平成十九年三月水明入会。二十九年同人。令和五年水明賞。

りんどう俳句会

現代俳句協会会員。

▼受賞対象句抄

一天に浮く初富士を遥拝す
なで肩の塚のすがたに春の水
どの竹も水辺へ傾ぎ竹の秋
チューリップ砺波平野を際立たす
村ひとつ植田の中に浮かび居り
緑蔭を出で来て己が影若し
家系図を囲めば長き夜となりぬ
野分立つ最終便を待つ女
秋風や絵の削れゆく絵蠟燭
渡月橋わたりきる間の時雨かな

季音賞

笹本啓子



受賞のことば

春の雷が舞った、三月十日の朝主宰より、「季音賞に決まりましたよ」と、お電話を頂きました。この時は嬉しさの反面、戸惑いもありました。

それは未熟な私がという思いと、難病を抱えている為、俳句を続けて行けるかと言う不安があつたからです。

長年親しんだ俳句、この賞を糧として、これからも体調管理に努め、俳句作りに精進してまいります。

主宰始め選考委員の先生方ありがとう御座居ました。又私を指導して下さいました句会の先生方、句友の皆様にご礼申し上げます。

これからも御指導宜しくお願い申し上げます。

▼受賞対象句抄

薄水をタツプダンスの如く踏む
春の雲がばつと開く河馬の口
薫風と遊んでをりぬ髻髪
分け入れば獣道やも梅雨茸
潮騒の磯辺にふたり星月夜
秋めくや飛行機雲の絶巔よ
観月や般若の面の奥座敷
秋高し機影に確とJALマーク
小鳥来る枝に庭師の豆紋り
小春日や鳥の渡しに旅役者

かな女賞

石井喜恵

受賞のことば

〔略歴〕昭和十三年東京生。
平成十三年水明入会、二十四年水明
賞、二十七年季音賞、令和五年句集
「風を踏む」上梓。

第一例会、第四例会、珊瑚の会、雛
の会、なごみの会。
現代俳句協会会員。



春の夕暮れ、主宰よりのお電話で「かな女賞」受賞のお知らせを頂きました。私にはとても手の届かない水明賞の賞と思っておりましたので、今だに実感が沸きません。「ありがとうございます。頑張ります」と返事はしたものの、主宰の「気楽にやってみて下さい」とのお言葉に救われる思いがいたしました。

唯々、俳句が好きで今日までできました。先師星野紗一先生の俳句教室で初めて俳句と出会い、目から鱗とは此の事、十七文字の表現の深さに引き込まれてしまいました。目の前の物の隠れた奥を詠む、言わない部分の意味を探ると云う何とミステリアスな事でしょうか。そして物語の始まりの様な俳句に魅力を感じます。

良く苦吟という言葉に耳にしますが、私は楽しみに詠んでこそ俳句だと思っています。これからは気負わず自分の心と向き合いながら詠んで参ります。

主宰をはじめ、諸先輩、句友の皆様、今後ともご指導の程よろしくお願い申し上げます。

ほんとうにありがとうございます。

畏怖と恍惚二つながら我にあり

かな女賞

鳥羽和風

受賞のことは

総ての人に感謝

〔略歴〕昭和十五年福井県生。
平成十八年水明入会。二十二年同人。
平成二十五年季音同人。水明賞。
平成三十年季音賞。令和四年山紫賞。
若狭水明会、鳥羽谷俳句会、やよい会、
山水会、乙花会、沖の石俳句会。
現代俳句協会会員。



三月二十二日 主宰より電話にて「かな女賞に決定です。おめでとう」と主宰の声である。一瞬 自分の耳を疑いました。かな女賞と言えば該当者の無い年も度々あり自分には、到底縁の無い事と思っておりましたのでスマホを持ったまま啞然としつつも主宰には大きな声で「ありがとうございます」と申し上げました。鬼之介主宰 主宰の月を先生、今は亡き城子先生孫左先生に進められ水明に入会をして初めて浦和の全国大会に参加させてもらった年、若狭は水明の故郷と聞かされ尚更水明との関係に悦びと深い繋がりを覚えた次第であります。それから今日まで早や二十余年無我夢中で俳句に没頭して来た積りですが「大男総身に知恵が回りかね」の通り俳句は何年起つても上達しませんが、こんな自分を今日まで引つ張つて来て下さった水明主宰 副主宰、城子先生を始め多くの先人達又沢山の句友の皆さんに心からお礼を申し上げると共にこれからも御指導下さいますようよろしくお願い致します。最後にこの吉報を下さった日の大安吉日のお心遣いに心より感謝致します。

新珠賞

皆川更穂

▼受賞対象句

ユリイカ ― 季の気付き―

急瀬や此処より先は春の川
揺り椅子の揺れの傾げる木の芽山
視地平を円かに映す石罅玉
夜すがらに刮目したる内裏雛
花を見て花に見られて花見酒
紅薔薇は饒舌白薔薇は寡黙
ごきぶりの現るる日の詐欺電話
苔茂る山には山の時間かな
満月の昇りゆくとき山低し
晩秋の色整ふる鷹の舞
団栗の落つや一つの影宿す
廃材に残る年輪冬ぬくし
ねんねこを夢ごと背負ふ夕厨
臘月や家電同士が喋り合ふ
年の夜に気付く釦の掛違ひ



〔略歴〕昭和二十五年新潟県生。
令和四年水明入会。令和六年同
人。
皐月の会。

受賞のことば

この度は新珠賞に選んで頂き、誠にありがとうございます。新珠賞は今回が四回目のチャレンジです。一つの題目のもとで十五句を揃えることで、毎回あたかもミニ句集を編むような体験をさせて頂きました。最初は句を並べてから表題を考えましたが、毎回異なる主題で俳句を考えるようになったことはとても良い訓練経験になったと感謝するところです。今回は「季節で移ろう平凡な生活のなかに、普段見逃していることの発見や気付きがあるのでは」というところに焦点を当ててテーマとしたものです。

私は霜多光代様からお誘いを受け、皐月の会で山本鬼之介主宰よりご指導を受けながら句友の皆様と有意義な時間を過ごさせて頂いていることに深く感謝しております。今後も俳句の楽しさを満喫できるように一層精進したいと思えますので、主宰、諸先生方、皐月の会の句友の皆様、水明俳句会の皆様には引き続きご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

新珠賞

穴戸洋子



〔略歴〕昭和二十二年宮城県生。
令和五年水明入会。令和七年同人。
コクーンシテイカルチャー俳句教室。

受賞のことば

この度は令和八年度新珠賞を受賞させて頂き、誠にありがとうございます。山本鬼之介主宰をはじめ選考委員の皆様にご心より御礼申し上げます。思いがけず大病を患い入院中で、主宰への御礼のご挨拶が遅れましたことを幾重にもお詫びいたします。幸い現在は退院し、句会復帰を目指して自宅療養に努めておるところです。

水明にはコクーンシテイカルチャー俳句教室のお仲間を通じて入会、俳句の面白さ、奥深さに感動しつつ楽しく勉強させて頂いております。応募作は住まいのある見沼区風渡野を中心に、日常目にする自然と暮らしをそのまま詠んだものです。誠に拙い作品ですが、今回の受賞を跳躍台に精進を続けたいと決意しております。

山本鬼之介主宰をはじめ、諸先生方、先輩・句友の皆様方の一層のご指導、ご鞭撻を心よりお願い申し上げます。

▼受賞対象句

茶柱立つ

菜の花の真中に仰ぐ富士の嶺
童心いまに語りかけつつ雛飾る
我勝ちに蒲公英の絮風に乗り
健やかな目覚めに梅の香り立つ
遥か来て哲学の道花の道
青梅の産毛の光買ひにけり
山国や四方の風聞く立葵
ごま粒ほどの蜘蛛の囀揺らす朝の風
渾身の力に頻る蟬しぐれ
うす味を基調の夕餉衣被
深きより水の音する紅葉溪
搗きたての光る新米いただきぬ
綺羅星や来福祈る除夜の鐘
どの枝も冬芽ゆたかに大銀杏
笹鳴や朝の茶柱太く立つ

鼓笛賞

森下山菜



〔略歴〕昭和二十四年岐阜県生。令和五年水明入会、令和六年同人。皐月の会、若鮎句会。

▼受賞対象句

二十歳の日々花野一面レモン色
相撲取手には嫁御のちひさき手
隕石の燃えて真つ赤な曼珠沙華

山紫賞

松宮保人



〔略歴〕昭和十六年福井県若狭町生。平成十八年二月水明入会。平成二十七年水明賞。鳥羽谷俳句会、大鳥羽やよい俳句会。

▼受賞対象句

水の秋年縞の湖鎮まりぬ
位牌堂を飾る穂長のみな反りて
アルバムに躍る心や春帽子

受賞のことば

この度は鼓笛賞をちようだいしまして、真にありがとうございます。選考委員の皆様、山本主宰、網野先生、先輩の皆様方には、厚くお礼申し上げます。今後はさらに勉強して、面白い俳句をつくっていきたくと考えております。皆様今後ともご指導のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

受賞のことば

昨年は、終戦八十周年記念の追悼法要が各地で行われました。遺族の一人として誓いのことばに「来年には、必ず子や孫と一緒に靖国神社へ正式参拝します」と書き記しました。その誓いが叶い、安堵の胸を撫で下ろしておりました三月末の朝、副主宰網野月を様から電話で「水明各賞選考委員会において、あなたが山紫賞に選ばれました」と御連絡をいただきました。誠にありがとうございます。このような栄ある賞を賜りましたのも、靖国の御霊のおかげではないかと感謝しております。今後ともよろしくご指導をお願い致します。

新珠賞への意気込み

審査委員長 山本鬼之介

昨年、水明創刊95周年を祝い、いよいよ創刊百年へ向かう
第一歩の年として、今年には昨年来を上回る応募を期待していま
したが、残念ながら二十編に満たない応募数となりました。
しかし、ここ数年に亘り賞獲得への意気込みを持ち続けて来
られた方や、今年新たに挑戦された方など、応募者の層の厚
みを感じることが出来て嬉しく思いました。事業部長と総務
部長の創意工夫による応募用紙の改善も大いに役立っている
と思います。

数年前から新人の多い句会を中心に、新珠賞への応募を積
極的に呼びかけてきた効果が定着してきたと思いますので、
今後もこうした地道な努力を、各句会の指導者や幹事、また、
俳句の先輩諸氏に続けていただくことを切に願うする次第
です。

さて、今年の審査結果は五月号で既報の通りですが、各作
品に目を通してみて、「誤字・脱字・送り仮名・旧仮名遣
い」などに以前に比べて基本的な誤りが少なくなったことを
喜んでいきます。

◆受賞作品についての感想

皆川更穂「ユリイカー季の気付き」

第一次審査において、各地区委員を含めた十名の委員の内
六名が最高点を付けた作品である。考え抜いた結果と思われ
る主題と副題の意味から察して、作者の新珠賞への意欲を
十二分に感じ取ることができた。

急瀬や此処より先は春の川

花を見て花に見られて花見酒

紅薔薇は饒舌白薔薇は寡黙

満月の昇りゆくとき山低し

晩秋の色整ふる鳶の舞

廃材に残る年輪冬ぬくし

ねんねこを夢ごと背負ふ夕厨

作者は二、三年続けて応募されたかと思うが、今回の作品
は、過度の力みが取れて作者と委員とが思いを共有できたの
ではないかと思う。この賞を発条にして、更なる高みを目指
し邁進してほしい。

六戸洋子「茶柱立つ」

皆川更穂氏の作品に次いで一次・二次予選共に高い評価を
得て筆者も一推しにした作品である。

何と言っても、作者の日常に即応した銜いのない自然体の

俳句が委員各位の心を捉えたのだと思う。

菜の花の真中に仰ぐ富士の嶺

健やかな目覚めに梅の香り立つ

遙か来て哲学の道花の道

山国や四方の風聞く立葵

深きより水の音する紅葉溪

どの枝も冬芽ゆたかに大銀杏

笹鳴や朝の茶柱太く立つ

俳句を続ける過程で、上達を焦るあまりに四文字熟語や銜った言葉を多用して本来の作者の個性を壊してしまった人を何人か知っているが、宍戸氏には受賞作品のような平易な言葉遣いで読み手の心に届く俳句を書き続けてほしいと思う。

◆受賞作品以外の十六作品からそれぞれ一句を選び、来年の応募を待ち望む筆者の気持の証とした。

秋潮のまるごと夕日呑み込みぬ

島と鳥つなぐ大橋星月夜

まぼろしのさくらの見ゆる遠枯木

山の辺の風小手毬をもてあそぶ

ジヨギングに天の恵みの青田風

ミモザ咲く独りの窓を溢れしめ

花筏ゆるり分け行く背鱗かな

雪見酒そろそろ友の来る頃か

落葉踏む足に纏はる日の匂ひ

ロザリオを繰る指太し冬深む

故郷は泣きたいほどに空つ風

春の路地「ロンドンデリー」漏るる窓

風花や逆白波の信濃川

鶯色の瞳に消ゆる秋夕焼

広重や空高く舞ふ鯉幟

雷鳴やほんとは怖い笠智衆

門真宏治

椎名泰子

田中弘子

阿部幸代

榎本道代

香田裕誌

中村留美子

平野 楽

森下山菜

◆応募に際しての注意事項◆
来年応募される方は、左記の諸事項を熟読して臨んでください。

さい。

①文字は一字一字心を込めて丁寧に書く。●癖字に注意する。

②誤字・脱字を皆無にする。●辞書で充分に確認する。

③送り仮名や旧仮名遣いを正しく表記する。●辞書で充分に確認する。

④句を正しく配列する。●各季語の季節を理解して季節が入り交じらないよう注意する。

⑤題名を熟考する。●作品と同様に題名が大事。作品全体の

雰囲気即した題名が理想的。

選を終えて

石井喜恵

今年はず年より少い十八編の応募作品であったが、新人の方々の力作が揃った。そんな中、選考委員の慎重な選を経て二名の方の受賞が決定した。皆川更穂さん、宍戸洋子さん、おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

「ユリイカ：季の気付き」

皆川更穂

揺り椅子の揺れの傾げる木の芽山

ごきぶりの現るる日の詐欺電話

満月の昇りゆくとき山低し

晩秋の色整ふる鳶の舞

年の夜に気付く鉦の掛け違ひ

日常の何気ない発見を一句に詠んだ力量は見事である。又、凡そ詩的言語とは程遠い「詐欺電話」などを果敢に使い、読む者の納得した句とした挑戦を評価する。十五句目の「鉦の掛け違ひ」にはふっと力の抜けた俳諧味があり、楽しい締め的一句となった。題名は「季の気付き」の方が良い。

「茶柱立つ」

宍戸洋子

菜の花の真中に仰ぐ富士の嶺

遙か来て哲学の道花の道

山国や四方の風聞く立葵

深きより水の音する紅葉溪

笹鳴きや朝の茶柱太く立つ

飾らぬ言葉、優しい言葉が読んでいて心地良く響く。恰も作者と共に其処に居るようで、景が鮮やかに見えてくる。

「水音のする紅葉溪」確かに水音が聞こえてくる様な。茶柱が立った一日はきつと良い事があったのでは……。

次回に期待する印象に残った作品

「玉子酒」

鈴木藻好

定年を迎へし朝や石露の花

定年後の日々も充実しているに違いない。余生を楽しく。

「美ら海の風」

石黒由美子

芭蕉布織る潮騒近き板座敷

沖繩を詠んだ十五句。それなりの力量を思わせるがもう少し新鮮な眼差しが欲しい。

「シングル」

吉川拓真

裸木や喪に服するは思ふこと

祖父の死を詠むという難しい挑戦には並々ならぬ作者の意欲を感じる。題名のシングルは一考を……。

「風紋」

秋谷風舎

砂風呂や卯波の音を聴きながら

何といっても気持の良さが伝わってくる。正に至福の刻。

Bon voyage I 日高道を

令和八年度の新珠賞には十八名の応募がありました。

新珠賞は水明の他の結社賞と違い応募作品十五句の絶対評価で受賞が決定されます。その為にはまずは応募しなくては始まりません。

今回見事に受賞された皆川更穂、宍戸洋子のお二人には心よりお祝い申しあげます。

また今回は残念ながら受賞に至らなかった皆さんも、また挑戦を躊躇っている方も、是非来年を目指して頂きたいと思えます。

「ユリイカ 一季の気付き」

皆川更穂

題名に魅かれる。作者の身の周りにある様々な句材をとらえた意欲的な作品が揃っている。

急瀬や此処より先は春の川

晩秋の色整ふる鳶の舞

廃材に残る年輪冬ぬくし

ねんねを夢ごと背負ふ夕陽

臘月や家電同士が喋り合ふ

等の句は特に視点がよく、上手に叙景して良句となつていきます。

今後さらに精進されることを期待しております。

「茶柱立つ」

宍戸洋子

十五句を通じて作者の日常が上手に切り取られており、一

つ一つの作品に作者の目の当たりにした映像を共感することが出来ます。

菜の花の真中に仰ぐ富士の嶺

我勝ちに蒲公英の絮風に乗り

山国や四方の風聞く立葵

ごま粒ほどの蜘蛛の囀揺らす朝の風

深きより水の音する紅葉溪

等の作品には特にそれらを感じ取れる作品となっております。作者の奇をてらわれない俳句作りをこれからも続けていきたいと思えます。

その他の応募作品の中から印象に残った句を紹介します。

「百本に百の髪型曼殊沙華」

香田裕誌

「風花や逆白波の信濃川」

中村留美子

「社会毒知ることもなく終の蟬」

平野 楽

「鳶色の瞳に消ゆる秋夕焼」

森下山菜

「行く末へ余白を残す秋の空」

〃

「色のない学徒出陣式秋雨」

〃

「月光つつと小津の画角の中に入る」

〃

是非来年も継続して挑戦していただきたいと思えます。

「俳句の海」は広くそして深く我々を待っています。

時には荒波に翻弄され、また時には全くの風に途方に呉れることもあると思います。

皆さんの俳句の旅が素晴らしいものであるよう祈ります。
「Bon voyage」

新しい風 青木鶴城

先ず今年度の新珠賞を受賞された皆川更穂、六戸洋子のお二方に心よりお祝い申し上げます。

令和八年度は十八作品からの選考となったが、今年度の作品も其々工夫を凝らして練り上げられ、個性のある作品が揃った。ただ題名にこだわりすぎた結果十五句に無理が生じた作品や、安易な題名になってしまった作品が増えたのは残念であった。

『ユリイカー季の気付き』

皆川更穂

急瀬や此処より先は春の川

視地平円かに移す石罫玉

団栗の落つや一つの影宿す

年の夜に気付く鉦の掛違ひ

ユリイカーとは古代ギリシャ語で「見つけた!」で、十五句に何かしらの「見つけた!」がちりばめられた作品。急瀬に「ここから先は春の川」と春を見つけ、石罫玉に丸い地平線を見つけ、落ちた団栗の影に作者の人生の何かを見つけたのである。正し、「視地平」の言葉の選択には無理があったか。

十五句の最後に鉦の掛け違いの句があり、この後のことを想像させる余韻を残したのは憎い。

『茶柱立つ』

六戸洋子

童心いまに語りかけつつ雛飾る

山国や四方の風聞く立葵

渾身の力に類る蝉しぐれ

深きより水の音する紅葉溪

全体的に力の抜けた作品で、普段の暮らしの中の一面を切り取った作品群に好感を抱いた。雛飾りをしながら幼い日の自分を顧みる作者。山国の句は中七の「四方の風聞く」の措辞が素晴らしい。蝉しぐれの句は「渾身の力に類る」との表現に魅力が感じられた。紅葉溪の句は、水の音に哲学的な何かを感じたが、「遙か来て哲学の道花の道」の句が前に置かれていたからか。題名はもう少し考慮が欲しかった。

残念ながら受賞は逃がしたものの、特に印象に残った句を下記に紹介する。来年の作品に期待したい。

仄暗き花のトンネル夢の道

反町 修

風薫る水田の雲の千切れけり

前田夏野

草陰に白きをこぼす節分草

三浦真由美

ログハウス成りて寿ぐ梅真白

〃

御仏の手よりこぼるる花馬酔木

結果の古木の中の紅葉かな

〃

今日ありし良きこと見つけ初日記

〃

寒の水含み地球の音を聴く

伸び代

菅原卓郎

この度は、皆川更穂並びに宍戸洋子の両氏の新珠賞受賞真におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。十八名の応募が有りましたが、昨年に比べ五名ほど減っております。ですので能ある鷹は爪を隠さずに来年度は是非ご応募願います。

「ユリイカー季の気付き」

皆川更穂

急瀬や此処より先は春の川

ごきぶりの現るる日の詐欺電話

廃材に残る年輪冬ぬくし

ねんねこを夢ごと背負ふ夕厨

晩秋の色整ふる鳶の舞

何気ない日常の一齣を具に抽出した十五句の中でこの五句は目を引きました。第一句、急瀬きゅうせつまり早瀬を過ぎれば雪消の川の水も温み春の川になる。聴覚と視覚に訴えて動きのある句に仕上げられています。第二句、大嫌いなごきぶりと詐欺電話の取り合わせの妙が秀逸です。第三句、ストーブに焼べる廃材の薪の年輪に樹木の「生」を感じ、季語の冬ぬくしを座五に据えることにより命の温もりを表現しています。題名の「季の気付き」が見事に嵌まっております。今後の益々の活躍を祈念いたします。

「茶柱立つ」

宍戸洋子

菜の花の真中に仰ぐ富士の嶺

遙か来て哲学の道花の道

青梅の産毛の光買ひにけり

うす味を基調の夕餉衣被

笹鳴りや朝の茶柱太く立つ

全体に力みの無い作風で、自然体で読める句が多いです。

第一句、菜の花畑に仰ぐ富士の山。中七の「真中に仰ぐ」で空間と距離感を表現して富士山がどんと見えてきます。第三句、細かいところに着目しましたね。光の当たる産毛で梅の新鮮さを上手く演出しています。着眼点が大変優れておりますので更なる精進を重ねて頂き活躍の場を広げて下さい。

今回惜しくも受賞を逃した作品で秀逸句を紹介します。

落葉踏む足に纏はる日の匂ひ

椎名泰子

冬晴の散歩の景でしようか。暖かさが感じ取れます。

セノートの底の底まで夏眩し

田中弘子

中七で透き通った海の神秘さが窺えます。

谷戸行けば百の白鳥空真青

阿部幸代

青空に白鳥百羽の白が映えます。実体験でしょう。

春風に乗せしセロの音「鳥のうた」

榎本道代

春風と雖も何となく切なさを感じる一句です。

今回十八名の作品を拝見しましたが、皆様の伸び代と創意工夫がひとしと感じ取れました。受賞を逃した方はもう一段磨きを掛けて頂き再度のチャレンジお願いいたします。

推薦委員寸評より

○大橋迪代

「ユリイカ」 皆川更穂

きっぱりとした詠みぶりが説得力あり、申し分なしの十五句に魅了されました。

紅薔薇は饒舌白薔薇は寡黙

満月の昇りゆくとき山低し

団栗の落つや一つの影宿す

ねんねこを夢ごと背負ふ夕厨

年の瀬に気付く鉦の掛違ひ

「心の窓」 椎名泰子

三味線のぴしと合の手生身魂

落葉踏む足に纏はる日の匂ひ

夜祭に初雪連れて神馬来る

○檜鼻ことば

「根を下ろす」 阿部幸代

地域に根差した日々の暮らしを綴った作品に共感を覚えました。

「トラベル」 田中弘子

読んで想像が膨らむ旅の十五句。旅のアルバムを見るかのような作品です。

○永野史代

「銀幕」 森下山菜

名画を彷彿させる。

ロレンスが駆ける熱砂の地平線

夏芝に正座して観る「飢餓海峡」

吸血鬼、笠智衆、裕次郎、馬髯、ヒッチコック、アラ

ンドロンの背にFIN

「シンゲル」 吉川拓真

死がテーマのかなしい十五句

人はみな一人逝きたり枯木立

○五明 昇

「美ら海の風」 石黒由美子

「美ら海の風」をテーマに、沖縄の四季の移ろいを詩情豊かに詠む。

様々な植物のほか、「シーサー」「珊瑚塀」「芭蕉布」「鳥

唄」「泡盛」など視点が細やか。

「茶柱立つ」 六戸洋子

何気ない日常を平易に詠み上げ、爽やかな印象を与える。

「真中に仰ぐ」「童心いまに」「産毛のひかり」「四方の風

聞く」「太く立つ」などの措辞が新鮮。「茶柱立つ」に句

作の喜びがあふれる。

新珠賞秀句鑑賞

網野月を

新珠賞応募作品から秀句と思われるもの、ならびに筆者の感銘を受けた句を紹介し鑑賞する。並びは選考時の作品に付された番号順である。

寒月や照らされて猫逡巡す

鈴木藻好

恋猫に対して作者が感じているペースと加えて少々の諧謔を感じ取ることの出来る句である。猫の逡巡は月下という明るみに出た事なのか、それとも別のことを想像した方が好いのであろうか。

白雨去り紫匂ふジャカランダ

石黒由美子

中七の「匂ふ」は、色が際立つ、もしくは鮮やかな色合いが光を放つように印象付けられる、と解釈した。夕立の後の亜熱帯植物の花の色鮮やかさに集中して叙述している。

肉体にセーターを置く棺かな

吉川拓真

他に「納棺式五角を描く冬の星」「死に触れて子規の句を読む寒き夜」がある。「シングル」という題名であるが、十五句は葬儀をテーマとしている。素材だけでなく措辞の選に多大な労力を要した力作であると考ええる。

山の辺の風小手毬をもてあそぶ

秋谷風舎

叙景に徹している句である。景を確と捉えて把握しているが、作者の感性を「もてあそぶ」という措辞に託している点も指摘できる。「風」に意志があるように捉えているのは、ある意味では擬人法的な技法である。

人影のなき霊園や紅葉散る

反町 修

人影の代わりに紅葉が散っている、ということなのである。「霊園」には何一つ動く影は無いのであるが、紅葉だけがその景に動的な要素を加味している。「霊園」という空間に紅葉の散ることで、時間が感じられるのである。

髪白きジローズ世代多喜二忌や

前田夏野

「ジローズ世代」と多喜二忌がどのような関係性を有するのかが判然としない。座五の「:」や「切」は難しい技法であるので、「多喜一の忌」としたところである。

揺るる穂に光集むる枯尾花

三浦真由美

「尾花」はたとえ枯れても光を集めて存在感を示しながら景の中に居場所を定めているものである。逆光の中の「枯尾花」は作者と「枯尾花」と光源の関係性を確定している。

寒の水含みて地球の音を聴く

門真宏治

壮大な構想の句である。「含みて」の作者個人の行為が「地球の音」に展開する心地の佳さが句の肝になっている。作者の精神が大自然と一体になろうとしている、ということである。

秋深し息太く吐く句読点

椎名泰子

「句読点」とあるので散文を味読しているのである。「息太く吐く」からは文章の意味を汲取りながら読み進めている様子が良く分かる。読書の秋さながらである。

寒明けや湯巡りの下駄ジャズ刻む 田中弘子

題名「トラベル」に因んで世界中を旅する句が並んでいるのだが、掲句は国内の旅であろう。湯の街の何処からかジャズが流れて聞えて来たのである。もしかしたら、作者自身が口遊んだスタンダードに下駄を合わせたのかも知れない。

心の根下ろす一打を除夜の鐘 阿部幸代

叙景でもなく事柄俳句でもなく、こころ決めした事柄を一句に仕立てるといふ作法がある。作者が自分自身に対して正対している証左なのである。

主持つ梅は蕾の耳傾ぐ 榎本道代

昨今は文体や文法を壊して表現することが俳句の世界で一つのブームになっているようであるが、掲句には将にそういった傾向を読み取ることが出来るであろう。壊しているというよりもメビウスさながらの捩じりがあるように思われる。

青梅の産毛の光買ひにけり 穴戸洋子

「青梅」の本質を真正面から捉えて、余すことなく描写している。「買ひにけり」の展開が心地よい。梅酒にでもするのであるうか。

日盛りにロボットのやうに人歩む 香田裕誌
近年の「日盛り」の酷暑ぶりを表現している。「ロボット」と

はよく言い当てたものである。中八の韻文としてはぎこちないリズム感が「ロボット」を描写するのにぴったりである。

ごきぶりの現るる日の詐欺電話 皆川更穂

現代的なウィットに富む句である。「詐欺電話」の存在感が作者の脳の中で「ごきぶり」と合致したのである。俳句的取合せ技法の新しい展開を感じる。作題「ユリイカ」の小宇宙に入り込んでしまったかのようなのである。

窯の火に笑ひ声乗せ夏野菜 中村留美子

中七の「笑ひ声乗せ」の主語は「夏野菜」を窯で焼いている人たちと解釈した。アウトドアを楽しんでいる人たちの気分が伝わって来るようである。

夏草や消えし白球探しをり 平野 楽

グラウンド場外の茂みに飛んだ白球を追って、探している高校球児を想定するのが常套の鑑賞であろう。芭蕉の名句があるので「夏草」に過去を思い出すというシチュエーションも成立するかも知れない。作者は「夏草」に青春時代を回顧しているのである。

雷鳴やほんとは怖い笠智衆 森下山菜

昭和の日本映画界の重鎮であり世界的にも有名な笠智衆は、好好爺の役どころが多かった。その名優を「ほんとは怖い」と言い放つのである。上五の季語「雷鳴」が何ともぴったりにしているようだ。

以上、寸評ではありますが、鑑賞させていただきました。

句集喝采

菅原卓郎

◆梅沢 弘「回転椅子」

ウエツブ

著者略歴 昭和三十一年埼玉県北埼玉郡生。平成十三年「野火」入会、菅野孝夫に師事。平成二十二年「野火」新人賞受賞。平成二十七年「野火」青霧賞受賞。平成二十九年野火賞受賞。令和三年「棒」入会。「野火」代表理事。俳人協会埼玉県支部世話人。

日常の身近なものを題材に街いの無い本質を突いた作風が作者の真骨頂であろう。さりげない言い回しに読み手の想像が膨らみ再度読み返してみたくなる句集である。

野仏の湯 呑茶碗の酒に雪

梅雨深し勾配のある地下通路

夏蝶を吐出しさうなサキソフォン

父の外套クローゼットの中の闇

第一句、野仏の供物にお酒とは面白い光景である。その湯呑茶碗に雪が舞い降りてくる。野仏にはかなりの物語が有りそうだ。第四句、亡父の外套が未だクローゼットにぶら下がったままだ。その暗闇には亡父の生き様が詰まったまま時間が過ぎてきた。父は暗闇で今も何かを語りだしそうである。

九十度椅子を回して秋の雲

雪形の山をうしろに農具小屋

菜の花の土手を斜めに上る道

稲稔る遠くの山がよく見えて

第二句、山の雪が融けだし愈々農作業の準備が始まる。鎖された田園に人の動きが見え出す季節がやってきたのだ。明るい春の一句。第四句、稲が稔れば後は取り入れだけで心配事は大分減ってくる。今までは田圃に全神経を集中させていたがこれからは向こうの山もゆつくりと眺められる。農民の秋の安堵の様子が窺える。勿論豊作であろう。

◆波切虹洋「深呼吸」

文學の森

著者略歴 昭和二十四年群馬県生。平成元年「草の花」入会、藤田あけ鳥に師事。平成十九年「港」入会、大牧広に師事。令和二年「くぬぎ」創刊代表。現代俳句協会会員。全国俳誌協会会員。埼玉県俳句連盟会員。

「生きている実感を詩情豊かに詠む」を旨とする作者の第一句集。丁寧な句作りで句意もすんなりと伝わって来る。題名の「深呼吸」は読み終えた安堵の深呼吸ではなからうか。

種袋母の小言のやうな音

老人はちよい悪が好き冷麦食ふ

湯豆腐や外してみたき人の道

暫くは闇を見てある遠花火

第一句、種袋を振るとカラカラと乾燥した軽い音がする。母の小言も機関銃の様に一気に乾いた声で捲し立てている。言い得て妙な一句である。第四句、打ち上げ花火は聴覚・視覚及び嗅覚を駆使して楽しむものである。打ち上げ音と開く花火の実景のズレがなんとも言えないのである。その暫しの闇を皆は味わうのである。花火は正に刹那の娯楽であろう。

遺言のやうな囁き夜の浅瀬

駐在に出前の届く聖夜かな

サングラス赤の他人になりたくて

噴水のてつべんの水転がれる

第一句、盥に入れた浅瀬が夜中に何やら囁いている。泡を出しながら一言眩くと体を入れ替えるように底に沈んでゆく。上五中七の措辞が浅瀬の砂出しの景に見事に嵌まっている。鋭い観察眼である。第四句、噴水の頂点に水の球が転がり跳ねているように見える時がある。水量水圧の関係からであろうか。噴水の魅力をまた一つ教えてくれる一句である。

山本鬼之介 選

水明集

人里の安堵の調べ雨水かな
手繰り寄す木の間隠れの春の月
ひと搔きの手触りあらた春の土
靴跡の窪み大小春の泥
宝箱ひとつ加はるさくら貝

若狭 岡本祥子

利根 倉田星歩

帰る雁細波残し棹を成す
春の雲内房の山越え行けり
流水や動くものありその上に
青饅や舌に転がす大吟醸
朝まだき雨戸を叩く強東風や

いくさなき元号いくつかのほり
じやが薯植う綾瀬はるかと握手の手
潮騒の遅日の駅にひとり降り
蝶とまるデッキの赤いチエロケース
四尺のオヒヨウが揚がる涅槃西風

さいたま 森下山菜

付き離れ流れに迷ふ梅二片

馥郁と梅の香匂ふ梅の里

紅梅や梅花象るマンホール

道灌と越生の春を楽しめり

神牛の額の黄金春の池

元田亮一

陽を弾く氷の上の桜魚
地に響く馬追ひ運動寒明ける
春浅し水底の鯉徐行せる
枯色の麓を奔る山火かな
山を焼き山の輪廻を助けけり

反町 修

紅梅や昼間の月の見え隠れ
超特選の花丸貫ふ春の夢
咲分けて紅梅の紅薄くあり
みなかみの利根の源流春浅し
あさまだき今日啓蟄と鴉鳴く

飯田忠男

異国路の時差の戸惑ひ春夕べ
砂粒の一分間に春愁

越谷 阿部幸代

武蔵野の駅に春の燈独歩の碑
春めくや新色ルージュ並ぶ店
紅梅の枝垂れをくぐり小社へ

手話話者の豊かな時や春電車
轟立ちし着ぐるみの鬼節分会
日当たりてなほ馥郁と白き梅
足踏みて順番待つ子春浅し
千石船通ひし名残鯨煮る

さいたま 田中弘子

蔵町の舟の行く手に猫柳

さいたま 綿引まりこ

薄闇や啜り泣くかに流水来

平塚 丸屋詠子

南仏のミモザ満つ村ワイン手に
浮雲にマイウエイ歌ふ雲雀かな
巻頭句祝ふ友あり風光る
桃の花慈母観音の丸き頬

海明けて黄昏空を鳥の群れ
鶯やひと日の幸をもたらせり
インカ神話の女神の話春の月
啓蟄や遺跡発掘したる穴

薄氷に風の記憶の残りをり

皆川更穂

墓碑の夫最も若し竹の秋

さいたま 本橋稀香

草焼くや一村なべて燻さるる
運慶の眼差のどか興福寺
廃線の夕日に睦む露の臺
公演の跳ねて二人の朧月

読みきれぬ本を抱きて二月尽
木の芽風「山門不幸」の立札に
朝まだきホテルロビーの雛納
膝にくる幼の和毛蝶の昼

道端の水仙香る漁師町

寺町知子

ものの芽に高まる音や小夜嵐

霜多光代

終末までの八十五秒冬の雷
秋々瀬の川風緩み土手青む
鶯や花の便りがつきつきと
冴返る夜のサイレン咆哮す

ものの芽の朱しが美しき袖垣根
啓蟄やわが街を往く鈍行車
軽やかな春外套のルポライター
旅に出るスカイブルーの春コート

春北風が通り抜けたる長屋門
実家では今が時ぞと梅真白
首飾りは真珠と決めて入学式
井伊の墓守る紅白梅見かな
一歳の児と笑顔で覗く犬ふぐり

さいたま 森下美智枝

干満の潮に踊る雛かな
そよ風のため息漏らす猫柳
冴返るインターホンに貌と声
カルストの台地の果へ進む野火
杜の空晴れ残しつつ春時雨

さいたま 秋谷風舎

黒漆の天守に暮雲冴返る
張り詰むる神殿の巫女冴返る
砂利を敷く保線の音の冴返る
看護師の詰所に紅のシクラメン
鶯の調ふ声をちつと待つ

岡田宣子

猫柳思ひのままに生きゆけり
冬五輪力出し切り涙かな
春一番やせたる母は飛ばさるる
紅と白梅従へて屋敷門
夜なべするどてらの背中ぬくぬくと

東京 畑宮栄子

立春の風に煌めく波頭
春ならひ一気月季を戻しをり
園庭を春北風走り児も走る
雨後の紅あまた輝き花椿
下萌にふんはり着地むら雀

菅原真理

寝ぐせにて鍋底捜す蛭かな
横顔にほつれ毛のあり雛飾
ささやきは鼓膜の奥へ春の風
街の灯をいよいよ照らす春の雪
進化してゐるのかヒト科山笑ふ

さいたま 石関六弦

日輪へ一直線に野火走る
鷹鳩と化して紡ぐや恋の歌
初花や新郎の手に新婦の手
古雛夫婦円満共白髪
算術の夢に目覚むや三鬼の忌

小林京子

絵手紙の筆の味はひ猫柳
戻り待つ渡しに着き場猫柳
風笑ふとき猫柳触れてみる
春時雨合格の報祝ふごと
春時雨少しだけ軒借りてます

門真宏治

折詰の隅に青饅ほほゆるむ
青饅を作る子の背に恋の文字
水温み目覚めの一杯身に優し
諍ひもふつと和みぬ初音かな
吹き曝し神田の書架に春の雪

吉川 杉浦千祐

春立つや二人で向かふ印章屋
留守宅の猫に土産の猫柳
ふつふつと旅への思ひ春立ちぬ
声高く雲雀は空を支配せり
春立ちぬ早朝けいこの声清し

さいたま 川島夕峰

菜を洗ふ蛇口豊かに春の水
人の声鳥の声あり春うらら
春炬燵何時か一人となる二人
万物の一雨ごとに春めけり
ほつほつと梅の綻ぶ三方五湖

若狭 山崎郁子

宍道湖の朝靄に舟蜆汁
近すぎて見えぬものあり春の泥
いつもより街華やかに春時雨
春時雨開店前の傘の列
生け花や高き位置取る猫柳

平野 楽

マネキンの指の白さや春寒し
春寒を急ぐのらねこ夕間暮れ
春泥にジャングルジムの四面楚歌
犬ふぐり覗けば深き水路
若布届く包みに島の陽の匂ひ

上尾 室井早都子

腰越の海をわたるや春疾風
夕闇や今は静かに花見茶屋
独り者お伊勢参りも足早に
右膝の機嫌上上梅見かな
来客の旋毛あらはに春疾風

川口 新井のり子

主役にはなれずに匂ふセロリかな
畦道と水の流れや里の春
推しグミで口腔ケアと入学生
雪形や農夫見守る八甲田
お岩木や懐ふかく花林檎

若狭 畠中風花

朝市に姿よろしき春菊よ
ご近所の梅に幸せもらふ日よ
蠟燭岩に春の夕陽やワンダフル
春菊の鮮度を生かし作り置く
古民家の梅見最高青天下

さいたま 小川洋子

寄り来たる輩の甘言春の宵

さいたま 香田裕誌

切株に寄り添ひ咲けり遅桜

木の陰で飯皿見つめ雀の子

和歌山 南條さわゑ

菜畑の香り膨よか風に色

春の野や食卓飾る野草摘む

鶯や村に似合ひの声に鳴き

春の雨ぼとりぼとりと語りをり

春日差す出窓の主三毛の猫

春の午后空まで響く反戦歌

金箔や海鮮丼の螢烏賊

吉川拓真

若狭 森下風湖

焦茶の器白眼の螢烏賊

薄桃色に淀を染めたる花筏

螢烏賊分け合ふ今が人の生

花筏旅は流れに身をまかせ

ぶちじゆると旨み広がる螢烏賊

帯解きて息ととのふる花疲

螢烏賊嚙みて喜び狂ふ音

降り注ぐ光のどけし五色の湖

母子像の固き乳房よ二月尽

大阪 遠藤人美

さいたま 阿部貞代

「御自由に」使ふ膝掛け梅見茶屋

渴水の川底つづく春の鳥

洋館の和室に座する江戸雛

公魚や湖水の下に眠る村

袖口の鈍きてかりや卒業す

河川敷野手の着地に犬ふぐり

心地よき即興ピアノ山笑ふ

保険屋のひそひそ話春のカフェ

尖塔のひしめく街よクロッカス

さいたま 湯浅 和

播磨 進

はくしよんは噂じやないよ春の風邪

鶯や童楽しきリフレイン

春の風邪くしやみ抑へてコンサート

娘は巢立ち出窓の雛は妻に似て

植木鉢並べて待てり春早し

入学式朝の机の腕時計

和菓子屋に並ぶ品品春きざす

春泥や小さき靴跡ここかしこ

船盛りの舳先あしらふ青若布
はね上げし今朝出来たての春の泥
春寒の湖畔にひそと辰子像
剥落の寺の土塀や春寒し
チョーク絵の線路のつづき犬ふぐり

さいたま 穴戸洋子

春シヨール母の匂ひと話す朝
行列のうはさの店や春シヨール
大涌谷を見下ろし震ふ春シヨール
蝌蚪の紐じつと見つむる昼下り
川面に時にぶかりと蛙の子

さいたま 緒方みき子

山路行く金剛杖や犬ふぐり
金縷梅や二畳台目のほの明り
梅が香と共に潜りぬ鬮り口
水温む声明もるる花頭窓
母鳥は羽ばたき指南水温む

石黒由美子

夢の母の笑ひてをりぬつくしんぼ
鉢毎のパンジーの黄のこんもりと
老幹を労る梅の香のやさし
蜂の巣を外す神の手庭師の手
風に乗る小犬のワルツ長閑かな

羽島秀子

手袋の指で数ふる十円玉
早春や野山が息吹く木木の枝
早春の華展の部屋のかほる花
公魚漁山背景に宿の窓
瀬切れなる川に雑草残る鴨

武田重子

春の雪綿飴の如溶けて消え
叢草にまろびて膝の緑かな
細き枝去年より増えし雁供養
春風に急かされ木木の芽膨れ面
風物詩今やなりたる花粉症

駒谷行雄

浮浪雲雁呼び合ひて帰らんと
雁帰る列を外るる一羽二羽
今日明日は風の強くて雁帰る
見上ぐれば涙ぐむかに春の星
窓越しにちさく手を振り春の星

東京 山中いちい

春めくや夫婦あはせて一馬力
春の野やもぐらの穴の貫通式
日の丸に球場揺るる春の宵
春の月母の教へのうそ笑ひ
不明者の無言の叫び寒戻る

若狭 松村笑風

古雛の微笑み受くる公民館
啓蟄ややつと一步を野良の土
淡雪や詠歌で包む野辺の列
雪解けて声真つすぐに隣畑
校庭に昼休みの児草青む

若狭 西川夕月

全力で夕焼の中進み行く
一秒の呼吸取らるる炎帝よ
これからも家族の側に新茶かな
貴方から出直すための衣更
夏の夕ナンとチキンをタンドール

所沢 関根千恵

万緑の宮に一礼登校す
スカートも髪も巻きあげ南風吹く
意に反し小走りになる大南風
桐一葉我が人生に悔いは無し
青梅の産毛秘かに輝きぬ

佐野友夏

じやれ合ひて光遊ばす猫柳
猫柳じやれて確かな絆かな
春時雨古民家カフェの軋みかな
春時雨ブロンズ像を弾きたる
拘りを手放す齡春時雨

さいたま 木谷葉子

黒塀や満作の花ちぢれ咲く
古草の絡み絡み横たはる
古草になりても未だ佇みて
丈長き古草の影モノクロよ
古草や車輪の下に踏まれをり

さいたま 小野町子

蜷の目世の行く末を見つめけり
ひな祭子らの笑顔に感無量
「りくりゅう」の涙に涙し蜷汁
贈りたる雛が間に合ひ感無量
纏れても笑みを絶やさぬお雛様

榎本道代

ぼたん雪丘の病院見え隠れ
いつになく眠れるやうな沈丁花
女学生の頃の話や春の母
やうやくに階段の上日脚伸ぶ
手袖の明け行く色や春隣

横浜 石井妙子

春時雨駅へと急ぐハイヒール
三つ編みの少女スキップ猫柳
ぬくぬくと光を纏ふ猫柳
赤ちやんの下の歯二本水温む
野遊びや経木に包むにぎり飯

三浦真由美

回廊の僧のすり足春時雨
春時雨茶舗の暖簾を濡らしをり
少年の語る宇宙や猫柳
近道の靴に重たき春の泥
バレンタインデーチョコで焼酎飲む男

さいたま 石井直子

雛の髪手櫛で揃へ飾りけり
色褪せどなほ清らなる雛の顔
雨を得て地押し上ぐるやチューリップ
フライパンくるつと返す春の朝
燕飛ぶ青突き抜けて我もまた

さいたま 伊藤美津子

道真の絵馬連なりて春めきぬ
春めくや五十年ぶり同期会
春めくや鉢の植ゑ替へあわただし
春めきて庭にぼつぼつ緑色
雨不足懸念の募る一の午

北出久美子

抗へぬ春一番や明け鴉
東風吹いて生氣生まるる畑表
朝東風のビルに弾けて加速せり
正客に招かるる婆雛の宴
一式の雛の鎮もる小箱かな

鈴木藻好

春夕焼スケートリンクに車椅子
満月の席を用意し桜囃
春彼岸六地藏に風柔し
春景やヨガにつづいてオムライス
春夕焼供花の乾びし六地藏

山下ユリ子

金縷梅や朝日の光ふりこぼし
暖かや座蒲団二枚縁側に
花冷えや止まりしままの大振り
春めくや野原をぬらす朝の雨
骨董屋に椅子すすめられ日永かな

大神満智子

我が為に飾りし小さき紙の雛
乳飲み子の近況嬉し春の朝
おどおどと自転車漕ぐ子に桜舞ふ
今もなほ涙覚ゆる大石忌
風に舞ふたんぼぼの絮吾子の笑み

鈴木和子

風まかせペンペン草と自由人
ちんまりと吾子の正座や春彼岸
横顔に亡き人想ふ男雛かな
白寿とて薄く紅ひき雛祭
鯉一尾慣れた手捌き太き腕

和歌山 嶋田洋子

入り彼岸君の笑顔を思ひ出す
春分の日父のお骨を納めけり
春雨に村の石佛泣いてをり
雛まつり和服の似合ふ祖母と孫
春炬燵いまでも夫のゐるやうな

大阪 海老名ノルン

古雛色の褪せしもなほ雅
顔気色ひびの悲しき雛かな
ものの芽の小さき先つば天に向け
春の野に摘みし小花の青臭さ
大甕にどんと活くるや花辛夷

さいたま 小山あつ子

おぼろ夜や脱ぎ揃へたる靴二足
淡雪や病む子の読める漂流記
春愁ひ岩波ホール在りし街
我が夫の机上は魔窟春暑し
和らぎし妻の背の黙春日傘

さいたま 上野和子

草餅をちよつと重ねて折にせり
杖ついて草餅求む祖父の音
土雛の胴太かりてのほほん
右左しじみ寄せてはけふの事
ぶらんこや空高高と故郷かな

清山尚己

ハートの葉数比べ選るシクラメン
水やりてすつくと立つやシクラメン
東雲の石の教会冴え返る
島島の祈る鐘の音冴え返る
記念樹もふと眺むれば老梅に

稲野幸子

年賀状去年の粗相を詫ぶる文
初場所や小兵力士の土俵際
春場所や「負け」を教ふる綱の道
冬ざれの鳩十七羽揃ひ踏み
トランプはどれもジョーカー冬ざるる

三郷 戒能邦人

遠き日の五感いざなふ野焼かな
桃の花空家にありて咲き溢る
和紙人形を彩ふや緋桃一花
お開帳袖振り合ふもご縁かな
寄り合ひの茶器は筒状春寒し

篠原さよ子

心地よき春の時雨や道祖神
春時雨チユロス屋台の早終ひ
猫柳児の手ひらけば弾けゆき
猫柳空家に座して二年かな
白梅の無垢を写せり花頭窓

さいたま 西窪弘子

鏡餅元号のある国に生く

さいたま 小山泰生

仮の宿鶯のこゑ遠くきく

犬ふぐりしやがめば昼の小宇宙

むさしのの鴨川うらら土手つづく

ペペロンチーノ風わかさぎ炒め昼の卓

猫柳湯気の立ちたる顔を出し

猫柳撫でたる指に猫の声

駅中の人待ち顔や春時雨

夕暮やカーテン越しに春時雨

弥次郎兵衛寒暖揺れて春の色

今西 操

大阪 飯塚智恵子

闇の世の赤提灯や春近し

梅の香に神神しきは愛子さま

蒼天へ黄の吹き上げてミモザ咲く

冷血のAI戦や春愁ふ

中東の民に戦禍や沈丁花

さいたま 横山礼子

金 沢 小島つぶ金

春雷やサボテン如き妻の棘

ほつとせし妻の寢息や春の雨

いつしかに積もり解けにし別れ雪

水温み噂も湧きてをりにけり

常ならぬしじまを聴けり鳥帰る

今年また庭に目覚めしクロッカス

プロポーズ少し背伸びのクロッカス

早春の華展は黄色競ひ合ふ

早春の午後の窓辺のハーブティー

早春のはぐる櫛の芽ほろ苦し

さいたま 菅原靖子

東京 柳父はる

蝌蚪の水動かぬ空を映しをり

うぐひすの声に誘はれ女坂

群れゆけばシルエットの如鳥雲に

つばくらめ明け六つ待ちて来たりけり

花こぶしの真白極まる夜明けかな

さいたま 樋口元美

庭先のいづこからなり春の水
蹴り上ぐるサツカーボール春の風
紅白の幕張り今宵梅見かな
孫の手を使ひし夜更け春浅し
いづこへと流れゆくなり春の雲

さいたま 三森恵子

公園の日差し惑はす余寒かな
玄関の上がりかまちの余寒かな
青物の無人スタンド春めけり
道の駅あふるる春の野菜かな
空の青うつし大河へ春の水

東京 清水美千子

春シヨール彫刻の森ゆるり行く
たをやかや師匠らし人春シヨール
宮参り時時ゆるる春シヨール
変はりゆく己楽しめ蛙の子
古池の数珠子の数は百八つ

所沢 飯室夏江

九十七少女に戻りてひなまつり
何を見る終着駅の雪の先
一枝に紅白の梅方戒寺
オマーンから異例の退避春風
「沁みわたる」孫はつぶやき飲む葛湯

藤沢 小島喜代子

天婦羅の花咲かしをり露の臺
皺皺の春の林檎やコンポト
爺と婆独活の味噌汁朝餉かな
春の野や風の匂ひもバケツトに
「ヨイドン」兎らの走りや野蒜伸ぶ

さいたま 糸井しるく

振り向けど過ぎし日日無くぼたん雪
住み古れば庭のをちこち物芽出づ
ものの芽に今年も会へてこんにちは
八十年生きて夢見て弥生かな

宮代 関谷多美子

燕の巢五羽のひなが顔を出し
巣作りの鳩の糞除去わが日課
雛祭ひらがなだけの案内状
雛祭ちよこんと座り「はいポーズ」
山路より海辺の桜三嫁と

田口文字

退屈もいつかは忘れ梅の園
寒卵甘さ増す黄身大正解
態度の割に繊細な夫春浅し
白梅の硬さ見習ひオプティミスト

東京 中村まどか

作品鑑賞

山本鬼之介

手繰り寄す木の間隠れの春の月 岡本祥子

昇った春月が少しづつ位置を変えてゆく。木の間に見えていた月が、少し目を離していた間に隠れてしまい、然う斯うするうちにまた姿を現す。「木の間隠れ」がこの繰り返しの状態を情緒豊かに表現している。隠れることなく、常に自分の視野の中に居てほしいと思う気持が「手繰り寄す」という能動的な表現になったのだと思う。

帰る雁細波残し棹を成す 倉田星歩

秋に北方から日本へ渡ってきた雁が、翌年三月から四月にかけて、共に過ごした群れで繁殖地へ帰って行く。渡ってきた雁を迎えた時とは逆に、帰雁を見送る人の気持には淋しさが残る。湖沼や川から雁の群れが飛び立った後の細波が、淋しさの余韻になっている。リーダーを先頭にした見事な棹が別れの挨拶なのであろう。

潮騒の遅日の駅にひとり降り 森下山菜

海が間近に迫っているローカル線の淋しい駅であろうか。磯の香が漂い、どーんと潮騒が聞こえてくる。日が伸びてきたことを実感しつつ、夕暮れにはまだ間のある駅のホームに降り立つ。降車したのは自分一人だけで乗車する者は居ない。気儘な独り旅で、潮騒に惹かれて荒磯へ歩を運ぶ。

道灌と越生の春を楽しめり 元田亮一

埼玉県越生町は、梅の名所として、また、江戸城を築いた名将・太田道灌の生地として知られている。作者ご夫妻は、梅林で梅花の香に酔い、名物の手打ち饅頭で腹を満たしてから、道灌の生まれた場所「山枝庵」や山吹の里伝説の史跡などを巡ったのであろう。子供の頃から耳にしていた道灌を身近に感じ、一緒にその地を巡った気分になったのだと思う。結構な春のひと日であつたらう。

山を焼き山の輪廻を助けけり 反町 修

以前日本ではあまり例を見なかった山林火災が、最近あちこちで発生し、猛火が住宅地の近くまで迫ってきて緊急避難を余儀なくされる人々をテレビの報道で見て胸を痛めている。季語の「山焼く」は、早春の風の無い晴れた日に、野山の枯草を焼き払い飼料にする草や山菜類の発育を促すと同時に、害虫の駆除を目的として行う作業のことで、山火事とは全く異なるものであるが、何となく両者を関連づけてしまうこと

もありそうだ。

さて、本句の「輪廻」を、仏教用語のそれと解すれば、人間を主体とした生き物の死と再生につながるものであり、人と大自然との関わりの深さを説いているのだと思う。

あさまだき今日啓蟄と鴉鳴く 飯田忠男

二十四節気は季語の中に網羅されているが、暦を見ないで「今日は○○だ」と断言するのは難しい。作者が事前に今日が啓蟄の日であることを知っていて、それを早朝の鴉の声に結びつけたということになるが、鶯を春告鳥と言うように啓蟄で地中から出てくる虫を啄む鴉を想像すると、この俳句がすんなりと理解できる。

紅梅の枝垂れをくぐり小社へ 阿部幸代

小社は、上五から中七にかかる措辞から判断して、名のある神社の末社であると思う。枝垂れの紅梅というと、紅梅よりもさらに艶治なイメージが伝わってきて、本社とは別の利益を授けてくれる神様が祀られている。俗な言い方をすれば、縁結びの神がびったりのように思う。「くぐり」という言葉がその人の心の高揚感を表しているようで、洒落た俳句になっている。

蔵町の舟の行く手に猫柳 綿引まりこ

江戸時代からの情緒を遺している運河と蔵造りの建物の景

色が見られる場所として作者の居住地の比較的近い処では、栃木市の蔵の街と巴波川、川越市の蔵造りの町並みと新河岸川、千葉県香取市の小野川沿いの古い商家と蔵などであろう。一方西日本では、岡山県の倉敷市や津山市、鳥取県の倉吉市、愛媛県の大洲市、などで昔ながらの情緒を味わえるようだ。蔵町と運河を渡る風にそよぐ柳の景色はなかなか良いものであるが、猫柳を配したことで郷愁という要素が付加されたように思う。

公演の跳ねて二人の臈月 皆川更穂

「跳ねて」という言葉から察して、公演は東京では歌舞伎座か新橋演舞場または明治座での芝居を想像する。さらに思い巡らすうちに、「浮いた浮いたと 浜町河岸に 浮かれ柳のほずかしや」という歌の歌詞がふと口をついて出てきたのである。調べてみるとこの歌詞は、昭和十年に新橋喜代三(しんばしきよぞう)が歌って大ヒットした歌謡曲『明治一代女』の冒頭の歌詞であることが判った。勝手ついでに言えば、この芝居を明治座で公演の「劇団・新派」による芝居に設定すると、昔とは環境も全く様変わりしているものの浜町も近く、掲句の雰囲気もぴったりのように思えてくる。因みに、「新橋喜代三」は、昭和初期から中期に活躍した芸者歌手である。

道端の水仙香る漁師町 寺町知子

水仙と漁師町との組合せで先ず浮かんできたのは、福井県

の越前海岸の漁師町である。日本水仙の三大群生地の中でも最大級と言われている越前海岸の漁師町であれば、当然のこと町の路傍にも水仙が咲いていることであろう。具体的な場所は福井県の南越前町で、他には静岡県下田市の須崎がこの句の雰囲気にとりたりである。作者が以前水仙の咲く時季に観光で訪れたことのある漁師町の印象を詠んだ俳句であろう。

千石船通ひし名残 鯨煮る 田中弘子

千石船は、江戸時代に米を約千石（約一五〇トン）を積載できた木造の大型和船の通称で、日本の流通経路の大動脈であった海上輸送で年貢米や各地の特産物を運んだ主力商船である。具体的には、菱垣（ひがき）廻船や北前船などがこのタイプの船であった。因みに、前者は江戸と大坂間を定期的に航海した廻船で、後者は、日本海海運に用いられた北国船の呼び名で、蝦夷地から日本海を渡り、関門海峡から瀬戸内海を通って大坂に至る航路であった。本句は、往時に北前船で運ばれた鯨のことイメージして作句されたものと思うが、明治から昭和初期にかけて繁栄した北海道の鯨漁のことや、網元が住んでいた鯨御殿のことなど、豪勢な逸話がいろいろとある。筆者が以前函館の顧客から、「鯨の猟期が終わると、網元連中が京都の祇園に出掛けてひと月ほど豪遊した」という途轍もない話を聞いたことがあり驚いた。

大きな帆に風を受けて日本海の荒海を航海していた北前船の浪漫に胸を膨らませ、鯨を煮ている作者である。

インカ神話の女神の話春の月 丸屋詠子

インカ神話の中の主たる女神は、「パチャママ」（大地と豊穡を司る神）、「ママ・キリヤ」（月と女性の守護神）、「ママ・コチャ」（海と水を司る）とのことで、作者は、アンデス文明とインカ帝国に関して書籍やテレビの教養番組で学習したのであるが、その中で特に女神の話に興味を抱いたのでと思う。地上を照らす春の満月が、仰ぎ見る作者に語りかけてくる。

墓碑の夫最も若し竹の秋 本橋稀香

昨年末に永別されたご主人の名が刻まれた墓碑。先に亡くなられた方々の氏名と享年が記されているが、その中でご主人が一番若かったという内容の句である。菩提寺の境内にある竹の黄ばんだ葉が風にそよいでいるのであろうか、季語の「竹の秋」がそれを知った時の作者の気持を表しているように思える。

ものの芽に高まる音や小夜嵐 霜多光代

特定の植物の芽ではなく、木も花も草もすべての芽を揺らして吹き荒れている夜の風である。か弱いものの芽を対象にしてその音が次第に高まってゆくという内容に、不安な夜を過している作者の心情が活写されている。

春北風が通り抜けたる長屋門

森下美智枝

長屋門とは、武家屋敷や豪農・豪商の住宅で門の両脇に長屋（番所・使用人の住まい・厩・農具入れなど）がある門扉を中心に左右に部屋が並んでいる建物である。明治以後も長屋門のある屋敷が存続してきて、現在でも日本各地に堂々と風格のある建物が遺っているようだ。

掲句の長屋門が何処にあるものなのか、記念館的な建物か、それとも、今なお実用に供されている建物かは不明であるが、作者が東北地方を観光で訪れた折に遭遇されたことであろうかと推察する。もしもこの長屋門が作者のお宅のものであるとすれば凄いいことである。

鶯の調ふ声をちつと待つ

岡田宣子

鶯は春告鳥と言われて梅の咲く二月の初め頃から鳴き始め、初めはその声も拙いが、稽古を重ねて三月になると囀りが整い、「ホーホケキョ」と、聴いた人がうっとりする声になる。そして、もつともつと聴きたいと思っっているうちに、四月になると山へ帰って行く。夏山で四方八方から聞こえてくる鶯の鳴き声は実に力強く、疲れた身を癒やし力づけてくれる。

立春の風に煌めく波頭

菅原真理

やはり作者の故郷の日本海の波であろうか。冬の荒海も、春から夏にかけて穏やかになってゆくが、立春の頃はまだ荒々しさを残しているのではと思う。きらりと光る波頭に、近付きつつある越後の春を感じ取っている作者である。

日輪へ一直線に野火走る

小林京子

小高い処から野焼きの火を観察しているのであろう。ダイナマイトの導火線を走る火のように、野焼きの火が走ってゆく。やがてその野火が、山に沈んでゆく大落暉に届き、落日が爆発するような幻想にとらわれたのかも知れない。

干満の潮に踊る雛かな

秋谷風舎

川に流された雛人形が河口に着いた。引き潮で海に入った雛が満潮となって戻されてきた。「潮に踊る」が、流し雛の哀れさを印象深く描いている。

紅と白梅従へて屋敷門

畑宮栄子

「左近の桜右近の橘」のように、屋敷の門の両脇に植えられている梅であろうか。白梅と紅梅を従えている門であるから、中の邸宅もさぞかし立派で風情のあるものであろう。

水琴窟

(水明集四月号鑑賞)

池田雅夫

空の重洗ひ浄めて四日かな

清山尚己

「空(から)の重(じゆう)」は、正月のおせちの重箱であろう。三ヶ日で重箱がすっかり食べ尽くされ空になってしまった。「洗ひ浄めて」とあるから、おせちは代代受け継がれているもので一品一品に手間をかけて造ったものにちがいない。使い終った器に感謝を込めてねんごろに仕舞っている。

闇に浮く白川郷や冬景色

木谷葉子

飛騨「白川郷」の合掌造りの家並は世界遺産に登録されている。雪に埋もれた村は、ライトアップされていて幻想的な「冬景色」なのだ。世界中から観光客が訪ずれる「風物詩」である。「闇に浮く白川郷」だけでその風景が浮かぶ。さらに「冬景色」からは、白川郷を囲む山々までも想像される。

おでん鍋けふで三日め卓の上

新井のり子

「おでん鍋」は、いわゆる「煮込みおでん」で家庭の団らん料理である。関西では「関東煮」といわれている。大根やこんにゃくなどの食材を足して足して三日めもまた、おでんというわけだ。「けふ三日めの一工夫」などと推敲も。

御降のやがて雪へと変はりたる

木村小麦

「御降」は元旦に降る雨であるが、雪の場合にも使われる。めでたい新年に天からの恵みととらえられ「御降」という。五穀豊穡の吉兆とみる思いを込めて「富正月」ともいわれる。次第に「雪へと変はりたる」のであろうが、雪を遠回しに表現し、「やがて白さを増しにけり」などと工夫をすすめる。

のんびりと関東弁の初電話

遠藤人美

作者は大阪在住である。「関東弁」と「関西弁」のちがいをユーモラスに捉えている。ぶっきらぼうで気が短かいと云われる江戸っ子。言葉巧みな大阪人にしてみれば案外、「のんびり」なのかも知れない。その間合の相異を「初電話」で楽しんでるように思える。黒電話のころを思いだす。

正月の餅も御法度ホーム母

畠中風花

正月には「雑煮餅」は欠かせない。以前は餅を何箇食べたなどと自慢したものだ。介護ホームに入居している「母」であろうか。新年を祝いおせち料理がふるまわれる。が、餅は喉につまる恐れがあるので「御法度」なのだ。仕方がない。

脹よかな背にくるりと梟の目

飯室夏江

「梟」の顔は左右に半回転するので、まるで一回転しているように見える。ふつくらとした体に平面的で大きい顔が特徴。神社や民家の近くの林に棲息する。昔から人に親しまれていて、そのかわいらしい仕草に惹かれたのだろう。

冬至湯やほろり解くる胸の内

伊藤美津子

冬至の日に柚子の実を風呂に浮かべて入る「柚子湯」、すなわち「冬至湯」。風邪の予防などによいとされる。柚子の香りが高く、気持ちちが和むのである。胸の痞えが消えたのであろう。「ほろり解くる」のリズムがよく、安堵に重なる。

冬シャツの軒を過ぐるや荒川線

羽鳥秀子

荒川区の三ノ輪橋駅から北区・王子駅を経て新宿区の早稲田駅まで走る都電「荒川線」。住宅街の軒先を掠めて走る。「冬シャツ」を干す具体的な事象が身近に感じられる。哀愁ただよう電車に懐しさや往時を思い起こす人も少なくない。

小夜時雨黒塀続く神楽坂

小野町子

東京・神楽坂では「黒塀プロジェクト」が始められ、路地裏には石畳と「黒塀」が整備された。「小夜時雨」に濡れながら楚楚と歩く姿が目につかぶ。「つづく」で柔らかさを……

冬夕焼坂を登れば鐘の音

三浦真由美

冬の夕焼は夏のものより淡く短い。しかし、冬木に透ける夕焼は感動的でもある。「坂を登れば」町を一望することが出来る。そして、漂うように「鐘の音」が聞こえる。具体的に坂の名を、たとえば「だらだら坂」でつなぐことも……

汽車の窓から遠山のぞみ冬の旅

大島千恵

汽車に乗って「冬の旅」に出かけた。街並が跡切れ、車窓から「遠山」が見えてきた。そこに旅の期待感が表われている。語順を変えて印象を強く、たとえば「冬の旅遠山のぞみ汽車の窓」とするとすっきりし、字余りも解消できる。

除夜の鐘涙腺ゆるむ祖母とゐて

清水美千子

いよいよ一年が終ろうとしている。「除夜の鐘」を聞きながら、この一年をふり返っているのだ。さまざまなことを思い出し、「涙腺ゆるむ」ようなこともあった。「涙腺ゆるむ祖母」とも解釈されるので語順を変えて工夫してみたい。

櫟炭一俵肩に担ぐ嫁

糸井しるく

嫁いで来たばかりの嫁であろうか。櫟や櫟など堅い木の材質の炭を「堅炭」という。「肩に担ぐ」は「担ぐ」だけにし、
「一俵かるく担ぐ嫁」にすると、その驚きが表われる。

網野月を選

山紫集

行く先を風に尋ぬる春野かな

檜鼻ことは

春の野の花かんむりを愛し人へ

福田千春

ままごとのお客は何処春の野や

河野はるみ

春の野やザック枕に目を閉づる

元田亮一

大和とふ国のまほろば春の野

山岸久美子

春の野にポツンと立てるポストかな

山下ユリ子

思ひ立ち母を連れ出し春の野へ

山戸美子

春の野に歌口ずさみ手を繋ぎ

山中いちい

うづうづと待てり命よ春野かな

湯浅 和

春の野や地雷のなきに果てのなし

吉川拓真

ありありと春野の息吹秩父にも

横山君夫

春野風貨車ぐひぐひと吸ひ込みて

田中弘子

嫁姑交す言葉もなく春野

小山あつ子

春の野や太極拳の運び足

平野 楽

春の野や隙間に消ゆる鍵ひとつ

内田恵子

補助輪の取れて春野のグータッチ

新 曆文

春の野やバク転競ふ小学生

保坂翔太

春の野や夢の骸を弔へり	横山礼子	虫眼鏡尻ポケットの春の野は	石田慶子
春の野に婚姻色になる魚	綿引まりこ	春の野や風も幸はふ大和国	糸井しるく
春郊の色めく土手や川下り	秋谷風舎	春の野やベビーシューズのはづみをり	梅澤輝翠
春の野や脱兎の如く躍る胸	青木鶴城	スキップて歌口遊み合ふ春野	梅澤佐江
一束の菜を持って帰る春野から	阿部幸代	春の野や年少さんのピンク帽	遠藤人美
春の野に塞ぎの虫を捨てて来し	荒井俱子	逆立ちの手に春の野の鼓動かな	大場順子
咲きみちて我の手をひく春野かな	新井のり子	春の野を行く巡礼の二人連れ	岡田宣子
春の野や紫の靄その中へ	飯田忠男	春の野や摘むも語るも二人なら	川島夕峰
春の野や阿倍川に富士そり立ちて	池田珪子	春の野や心楽しく歌を詠む	倉田星歩
春郊のはるかに富岳背に筑波	池田雅夫	夕月のぼつてり上がる春野かな	小林京子
春野行くサンドイッチと文庫本	石川理恵	春の野やラジコン機追ふ竹とんぼ	近藤徹平
ゆるやかな春野やあそぶ子の笑窪	石関六弦	想ひ出の秩父路をゆく春遍路	佐々木史女

春郊や戻つて来ないブーメラン	笹本啓子	春の野を舞台に少女もろ手あく	鈴木玲子
春野道母と暮らして学ぶもの	六戸洋子	春の野を昔ジョギング今チャリで	関谷多美子
空中に綿羽まはりて春野かな	篠原さよ子	春の野にポルカ奏づる手風琴	染谷風子
春の野のこの先熊の注意書	渋谷きいち	春の野やパラグライダー風にのる	反町 修
春の野や天まで響く笑ひ声	嶋田洋子	駆け回る園児の声や春の野辺	高橋満耶子
春の野や気になる人を目で追うて	清水桂子	春の野や園児笑顔でおいごっこ	武田重子
ゴンドラに膝掛けのあり春の野へ	下川光子	春の野に誰が奏でる茶摘み歌	田中章嘉
あさまだき春野に匂ふ浅緑	霜多光代	ああ夢か春野にモンベの母の佇つ	寺内洋子
競ひ立つ春の野原へブーメラン	菅原卓郎	春の野やルーペ首から豆博士	寺町知子
春の野の姉さん被りかしましく	菅原真理	春の野に農婦の夢の無限かな	飛永 鼓
玻璃ごしの春の野悔し花粉舞ふ	杉浦千祐	春の野や口笛吹きつ摘む野草	南條さわゑ
春の野の怒涛に調べ貰ひ受く	鈴木藻好	春の野や風の電話す亡き友へ	西幅公子

犬のゆくモンローウオーク春野かな	野口和子	柔らかに膨らむ大気春野行く	丸山マスマ
朝ぼらけ春野を戯むる御崎馬	野村美子	春の野や縦横無尽にはぐれ犬	丸屋詠子
春の野辺甘くて苦き旬の味	畠中風花	春の野や歩に触るるものみな濡つ	皆川更穂
春の野や色とりどりの帽子はね	畑宮栄子	春の野辺揺れて煌めく草木かな	宮崎チアキ
春の野に放たれ牛のおどけ舞ふ	原田自然	春の野やかつて干拓されし沼	室井早都子
春の野や己が名前も知らぬ花	原田秀子	菩提寺は春の野の果て風の吹く	本橋稀香
春の野や土の小山の新しき	樋口元美	春の野や安房の小径に牛の顔	森和子
春の野はひとのこころを解放す	日高道を	春の野は行きも帰りも縄電車	森下山菜
あてどなく踏み入る春野やはらかし	曲淵徹雄	早春賦口ずさみ行く春野かな	森下美智枝
飛火野といふ春の野をいざ行かむ	正木萬蝶		
大の字になりて春野の匂ひ濃し	松宮保人		
福島の子らの誓ひや春野原	松村笑風		

山紫集作品評

網野月を

春野風貨車ぐひぐひと吸ひ込みて

田中弘子

オリジナリティーの發揮された句である。中七の「ぐひぐひ」は然程真新しいオノマトペではないだろうが、この句の構成の中では、「ぐひぐひ」があるからこそ、句意が通じていると考えられる。上五の「春野風」であるが、ふつう対象物は風に押されるかもししくは向き合うかするもののだが、この句の場合は「吸ひ込み」でいる。このパラドクスはなんであろう。風下に引き寄せられる「貨車」を想定すればよいのであろうが、風向きのイメージからすると真逆なイメージを作り出している。そしてこの句の「春野」は季語の本質である命溢れる季節の訪れ、とは些か異なる「春野」を演出している。「吸ひ込みて」に着目して、深読みを許していただければ、少々怖さも感じるほどのものではないだろうか。

嫁姑交す言葉もなく春野

小山あつ子

「嫁姑」の間に何があつたのであろうか。読者は二人の關係性をいろいろと想像して鑑賞するであらう。「交す言葉もなく」は仲が悪いのか、それとも阿吽の呼吸さながら言葉に

して春の野の美しさを褒め合うこともない程に、気心が通じている、とも解せる。俳句の鑑賞は、作者の手を離れた瞬間から読者に任されている部分である。どのような解釈、鑑賞がされようともこの「春野」の美しさは、言葉にできない程美しいものであることは、動かしがたい。

春の野や太極拳の運び足

平野 楽

この句の肝は座五の「運び足」である。太極拳の素材から肩や腕、手の形状を描出した俳句には多く出会うのだが、作者は「運び足」に注目している。このことは上五の季語「春の野」に誘発されたからであり、句意と「春の野」の間に作者の目に捉えられた両者の紐帯を読み取ることができるといえる。

春の野や隙間に消ゆる鍵ひとつ

内田恵子

何の「鍵」であらうか。家の玄関の鍵では大変である。春野まで乗ってきた自転車鍵であらうか。中七の「隙間に消ゆる」は、「鍵」を主体とした表現であって、「鍵」が勝手に消え失せてしまったように表現されている。事実はどこかに落として失くしてしまった、と解せるだろう。季語「春の野」の本質には、春の大らかさや晴れやかさとともに、すべてを吸い込んでしまうような不気味さも持ち合わせていることを本句は教えてくれている。一種の警句でもあろうか。「春の野」は次の世界にも繋がっているようだ。

補助輪の取れて春野のグータツチ

新 暦文

「補助輪」の措辞からは、自転車＝銀輪の練習をしていた

ことが想像できる。補助輪が取れてまだ間がない分、地面の柔らかい春野で試し乗りをしている風である。返って地面が柔らかくて、場所によつては凹凸のある分、乗り難いのかもあるのだが、転んだときを思うと「春野」が調度好いのかもしれないし、まだ公道を走る技量はないのであろう。「グータッチ」に込められた少年少女の晴れがましい面差しが容易に想像できる。母親父親もまた一安心というところであろうか。座五に「グータッチ」の措辞を配した作者の思いが、喜びの度合いを担保しているようである。

春の野やバク転競ふ小学生 保坂翔太

「春の野」にはいろいろな光景が展開しているようである。「小学生」たちの「バク転」の様もその一つのようにである。作者はその光景に出会ったのである。掲句は春の野に相応しい澆刺とした景を描出している。もしかしたら作者の幼少の頃の思い出かも知れない。

行く先を風に尋ぬる春野かな 檜鼻ことは

上五の「行く先」は一体、誰の「行く先」なのであろうか。私はこれから何処へ行ったらよいのであろうかと、風に尋ねていると鑑賞できる。または風に対してお前はこれから何処へ吹いて行くのかと問いかけているようでもある。「春野」は其処に佇んだ時に自己を見つめる機会を与えて呉れる様である。座五の「春野かな」は将にその坦懐を描出している。大自然は自己を正直な心に導いてくれるのである。

春の野の花かんむりを愛し人へ 福田千春

「花かんむり」を贈る「愛し人」をどのような人として想像すればよいのであろうか。指示詞を使用した措辞はもちろんであるが、「愛し人」という言い方も、作者にしか分からない人格を表現していると言つて良いであろう。その分、句意に判然としないところが出来るのであるが、この句の場合には、「春の野の花かんむり」を贈った人物というだけで充分に理解される。座五の字余りのリズム感が何を暗示しているのか、その解釈は読者に任ざれていると言つて良いだろう。

ままごとのお客は何処春の野や 河野はるみ

春の野を目前にすると幼い頃ままごと遊びを思い出してしまう。そんな心情が詠まれている。その幼い頃の「ままごとのお客」は今、いったい何処にいて何をしているであろうかと自問自答しているのである。幼い頃の友への思いが横溢している。「ままごとのお客」は男の子だったのか女の子だったのか？竹馬の友に性別は関係ないであろう。

春の野やザツク枕に目を閉づる 元田亮一

ハイキングや登山の途中に春野でひと休みするのである。その際に背負っていたザツクを枕代わりにするのであろう。春野で大の字になって、頭上に広がる空を見上げる時の爽快感を詠みあげている。思わず目を閉じて春野の香りを深呼吸したくなるのである。無心になれた時の喜びを感じる。

水明例会

第一例会（浦和）

菅原卓郎
小林京子 報

春障子今も軟派の老四人
折鶴の啼かず飛ばずや菜種梅雨
菜種梅雨朱の色重き曼陀羅
城攻めの悲話の空堀菜種梅雨
菜種梅雨音楽室の音合はせ
落縁に猫の転た寝なたね梅雨
軟らかき蝻の道かな昼餉時

微平
和子
喜恵
マスミ
亮一
卓郎
京子
以上特選

新社会人の出鼻をくじく菜種梅雨
蝌蚪しきり柔軟体操手足生ゆ
筑波嶺の黄金にけぶる菜種梅雨
菜種梅雨頼みの辞書は電池切れ
菜種梅雨堤黄色く吹雪けり
軟水にこだはる染師花衣
白粥に紅き梅干菜種梅雨
胸の痛みにそつと手のひら菜種梅雨
軟らかにもつと手ひ交す花の昼
親子連れ知らぬ間に消ゆ菜種梅雨

稀香
千祐
順子
延昭
チアキ
和葉
節代
はるみ
由紀子
亮一

懐しきべんべん草の語感かな
画板置き春の水汲む子がひとり
城山に彼岸桜のおちよほ口
憎しみを溶かす奇跡や春の水
春の水上着を脱いで靴脱いで
朝桜あなたを乗せる車椅子
落口に魚集まり春の水
サイホンにおどる珈琲春の水
広瀬川賑はひ乗せて水の春
バスが行く桜並木を人が行く
春の水流れ流れて田に恵み
山桜満ちて息呑む車窓かな
命継ぐ鯉の蠢き春の水
レガッタの揃ふ權先春の水
酔ひどれの千鳥足にも宵桜

敏江
妙子
いちい
鶴城
以上特選
慶子
亜弥子
千春
いちい
妙子
恵美子
敏江
峰雄
みどり
鶴城

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

微平
喜恵
和子
マスミ
卓郎
京子

一年を生きて安堵や桜咲く
新人は未知への挑み桜散る
ちる桜小さき子らの手の平に

峰雄
〃
恵美子

命継ぐ鯉の蠢き春の水
レガッタの揃ふ權先春の水
酔ひどれの千鳥足にも宵桜

峰雄
みどり
鶴城



第三例会（東京）

五明 昇
曲淵 徹 雄 報

竜馬像の遠き眼差し鳥曇

理 恵

洋館にギロチン窓や鳥曇

順 子

鳥曇渚に拾ふ虚貝

星 歩

墨堤に静けさ戻る鳥曇

康 世

撞く鐘の静かな余韻鳥曇に

昇

船の来ぬ潮待ち湊鳥曇

以上特選

先付を独活に山家のフルコース

順 子

ぐいぐいと筑波嶺を寄せ青き踏む

理 恵

肥後守で削る鉛筆春うらら

星 歩

帰る鴨鳴き声残し雲居路へ

千 祐

鳥風に酒席の余韻さましつづ

雅 夫

春昼の雲眠さうな風見鶏

康 世

鳥雲に鳩は旋回繰り返す

徹 雄

点滅する電波塔の灯鳥曇

昇

膝に置く牛たん弁当鳥曇

昇

第四例会（浦和）

石井 喜 恵
反町 修 報

初蝶の出自かしこき平家谷

昇

国旗市旗校旗へんぼん入学式

翔 太

イーゼルにとまる初蝶光る湖

章 子

初蝶のふはりと三度朝の庭

昇

牛二頭蝶も一頭風笑ふ
入学の子に校庭の大時計
ひとしきり飛んで何処へ蝶の昼
閉ざされし窓に蝶影昼ふかく
昼下り宙に戯れ合ふ春の蝶
学び直しのシニア大学一年生
あの人の進学先を聞かぬまま
蝶の昼子らが手を振る観覧車
背に余る鞆を揺らし入学児
入学や振り返る児に目で合図
やはらかき仮名の筆跡蝶の飛ぶ
名を呼ばれすつくと立ちて入学す
てふてふと揺れて漕ぎ出づ渡し舟

由紀子
喜 恵
以上特選
光 子
由紀子
修

第五例会（浦和）

河野はるみ
岡田 宣 子 報

佐渡の影探す霞の日本海

宣 子

さざ波に耳そばだつる薄霞

千 祐

柳の芽少しふくらみ珠暖簾

知 子

名画座の入り口探し柳の芽

義 子

堂塔の薄ら見ゆる遠霞

はるみ

白壁に芽柳映し通ひ舟

以上特選

暮れて尚明るき水路柳の芽

義 子

芽柳やこそはゆきかに身を揺りぬ

千 祐

うらうらと釣り人の黙春霞
芽柳や棹さす小舟緩やかに
朝霞小島も船も包み込み

知 子
宣 子
はるみ

若松例会（京橋）

正木 萬 蝶
石田 慶 子 報

脱ぎすてし服のぬくもり春の宵

千 春

雁風呂を焚きて鎮むる波頭

稀 香

芳名帳に懐かしき人春の宵

ひろこ

走り書短歌となりぬ春の宵

マスマ

違ふこととしてみて団欒春の宵

以上特選

散る花のひらりひとひら波に乗る
花影に揺るる青海波の袂

萬 蝶

千鳥が淵に夕波立てり桜どき

佐 江

波風の香りたのしむ朧かな

詠 子

当て所なく不忍池春の宵

京 子

句作りや電波届かぬ春の星

ひろこ

ラベンダー夜具にしのはす春の宵

千 春

ウオーキングの褒美は酒よ春の宵

邦 人

蟹気楼波まだ小さき躁と鬱

鶴 城

高樓の灯りほんやり春の宵

はるみ

春暁の窓辺ラジオの周波数

稀 香

木の芽風今出航の波優し

慶 子

想ひつるるや波は落花をうちよする

千 祐

酔ひ痴るる昭和歌謡や春の宵

星 歩

言葉少なく盃交はず春の宵

マスマ

彼に棲むジキルとハイド春の宵

萬 蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

春星やことばの棘の抜けぬまま

洋子

春雨や三条河原の二人連れ

〃

春光へ真珠筏の照り返し

和子

杖なしで越せぬ此の坂董咲く

千枝子

ぞろぞろと遠足の子ら我を抜く

ノルン

手を打てば「鳴き籠」ひびく春の寺

満耶子

湯煙のまつたり昇る花曇り

早苗

薔薇の芽の真つ赤に貰ふ明日の夢

〃

——以上特選

春光や遺影の夫の輝けり

ノルン

石舞台出て春光にめくるめく

和子

春光や飛び立つ子らの背を照らす

きわゑ

春光や歩き初めたる児の髪に

人美

喘ぎ来て城址一面董咲く

千枝子

春光や地獄で仏あらはるる

満耶子

春光を集め白髪まだ元氣

千世子

春の夜のスマホ間違ひ着信来

洋子

釣りたての鱈目ン玉海の色

早苗

古りしレターに思ひを馳せる朧月

子

☆

☆

嶋田

昔話あれこれ 57

丸山マスミ

伊周公のその後

伊周公は、罪を赦され大臣相当の待遇の宣旨を受けたが、出仕の途中で道長公の下人と伊周公の下人が小競り合いをしたり、道長公が金峯山参詣の途中で、伊周公が不穏な企てをしているらしいと噂がたつなど、落ち着きがなく軽率な振舞が見られた。身に覚えの無い噂であったが、伊周公は金峯山から無事戻った道長公の許にお詫びに参ると、ひどく氣後れしているような伊周公をみて、道長公は双六をしようと持ち掛け、いつの間にか二人は肌脱ぎになるほど夢中になったが、伊周公は、勝ちを譲るのだった。

死の前に、病氣平癒の祈祷をしようとしたが、参上する僧は無く、止むを得ず長男の道雅公が道長公に縋つて祈祷の僧を招いてもらった。

伊周公の臨終

伊周公には、源大納言重光卿の娘所生の姫二人と子息一人がいた。姫君たちはお后候補として大切に育てられていた。

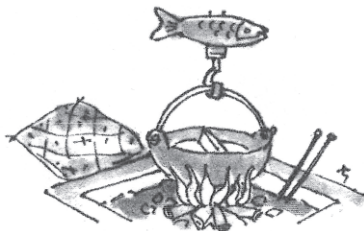
死が近い事を悟った伊周公は、姫たちを枕元に呼び、「こんな惨めな死に方になると分かっていたら、私より、お前たちが先に死ぬようにと神仏に祈念すべきであった。私の死後、みっともない生活をするようなら、あの世からでも恨むぞ」と泣く泣く申すのであった。

その姫の内一人は藤原頼宗卿(道長と明子の子)の奥方になり、沢山の子を産んだ。

けれどもう一人は、大宮彰子様にお仕えして大層重んじられているが、伊周公の想像もしなかった身の上と見受けられる。

(前回の記述の誤り 敦康親王の誕生は、997年でなく、999年)

各地句会



蛸蚪の会 (浦和)
 図書館に春眠の人またひとり
 春の夢姫は般若の相となり
 木の芽晴バターじゅわつと溶ける朝
 一膳の椀を彩る山椒の芽

秀子
 ひさの
 元美
 風舎

ロスの空春眠醒ますユニコーン
 ゲーテの忌若きウエルテル長寿なり
 春眠や地球儀廻る音に覚む
 何があつても上を向く木の芽かな
 若衆を集め頼みの春祭
 ミモザの会 (横浜)
 行く雲を映す柵田や蛸蚪の水
 茶屋街の紅殻ほのと臆の夜
 水たまりの蛸蚪突つきふあにおとと
 青空をうつして田水蛸蚪泳ぐ
 君の背に花びらひとつ別れけり
 不穏なり爪とく猫と蛸蚪の群れ
 空缶に忘れられたる蛸蚪二匹
 紅さすをじつと見つむる子よ春よ
 少年にうつすらと髭蛸蚪に足

幸子
 礼子
 五郎
 月を
 宣子
 詠子
 萬蝶
 史代
 亜弥子
 栄子
 慶子
 美千子
 玲子
 千春

雛の会 (浦和)
 独活膾先づは一献里の酒
 吟行の総身にまとふ花の冷え
 花冷や手にはホットな缶コーヒー
 花冷や旧交戻る喪の帰り
 雪洞のかすかに揺るる花の冷え
 独活の香に飛んで行きたい野山かな
 散り際の美学は流石桜かな
 野菊の会 (与野)
 永訣の涙の綺羅や春の雪
 白衣観音土やはらかき散り椿
 マンホールの意匠さまざまつじ燃ゆ恵
 弁当の粕漬に酔ふ花むしろ
 コクーンシヤカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)
 つばくらめ塔の九輪に十字切る
 急降下家路を急ぐ夕燕
 仙石線傾ぎて春の海せまる
 AIの笑みに化かされ蟹棧
 牧開きはや風と化す駒の影

喜恵
 燈女
 輝翠
 チアキ
 桂子
 公子
 佐江
 美代子
 和子
 光子
 延昭
 由美子
 俱子
 早都子
 昇
 美智枝
 公子

櫻蔭句会 (浦和)
 春服に妖精の羽舞ふ幼な
 そよ風に背筋伸ばすや春の服

公園は遠見の城や春霞

春の沼竿の動かぬ太公望

春コートくつ音たかく風にゆれ

髪切りてうなじ軽やか春の服

公報に春の募集と自衛官

春服の熟年憩ふ雨のカフェ

公園のお濠の水面花筏

羽衣に紛ふ軽さの春の服

男には春服といふ単語はない

「ハチ公」の飼主は来ず春風

さざきサークル (浦和)

言ひ訳の効かぬ道草春の泥

春泥を出でて会話の戻りたる

花水木兎小屋より子等の声

花水木小犬と歩く好きな街

洋館の並ぶ坂道花水木

遠回り街路樹長く花水木

春泥のヒョウ柄つけてけんけんば

りんどう俳句会 (浦和)

臙なる林を抜くる貨車の音

神獸鏡に写せば臙おのが顔

黙の森から山靈のこゑ臙の夜

花冷の京都嵐山渡月橋

自転車と乗り込む渡し春うらら

久美子

由紀子

千恵

真理

茂子

多美子

美子

玲子

行雄

幸代

昇

俱子

啓子

満智子

由美子

和子

君夫

順子

翔太

夕峰

徹雄

地球の夜明け渾沌として臙

風待ちて飛び立つばかり藤の花

色町の門燈淡し臙影

藤房や亀の微睡む心字池

鶴川山百合句会 (鶴川)

老の杖向けたる先に春の蝶

草に寝て初蝶空へ消えゆけり

初蝶ふはり小川を越ゆる野菜畑

初蝶や象はりボンをつけられて

親指姫の寝息健やか初蝶蝶

初蝶に遊ばれてゐる仔犬かな

初蝶や幼の前にまた後に

帰り来よ亡き兄連れて春の蝶

初蝶や心に微風残しゆく

野ばらの会 (浦和)

枝垂れ桃手折りし一枝躊躇に

花生けて日毎葉を吐く桃の花

子の未来親の未来や桃の花

青い目の人形にこり桃の花

逆上がりでできたできたよ桃の花

繭の会 (浦和)

散る桜捨つる物みな備蓄品

手を振って帰るゆく人花祭

まりこ

寿夫

風子

卓郎

雄二郎

史代

広子

千春

萬蝶

理恵

美千子

まどか

玲子

秀子

茂子

栄子

夏江

みき子

夕峰

寿夫

採る人のなき菜の畑や忘れ霜

里方の枕木踏めば花祭

備忘録どこに置いたか蝶に問ふ

忘れ霜あの人今日は誕生日

忘れ霜下駄の鼻緒の想ひ出か

忘れ霜あと幾年の薄化粧

花まつり目蓋の奥に慈母の顔

花まつり天上天下誰も在り

園児らの今日のお散歩花まつり

黒髪も老いに備へよ鷹女の忌

櫛の会 (浦和)

赤松の高さに透けるからすの巣

手を翳し軒の鳥の巣思ひやる

長女次女雛にそれぞれ親の愛

雛祭ひらがなだけの案内状

鈴の音のかすかに聞こえし雛

客となり気取る男の子雛祭

俳句の手ほどき (岩槻)

礼服のタイの白黒つばめ来る

肩掠め水の匂ひの朝燕

つばくらめ儀装馬車には燕尾服

火吹竹遣ふ風呂焚き山笑ふ

土間の奥里の燕と雨宿り

流線を描き巣もどりつばくらめ

和子

さよ子

伸子

小麦

しょうご

まりこ

風子

月を

京子

風舎

朋子

裕誌

富子

文子

あつ子

千重子

延昭

佐江

徹平

翔太

幸代

久美子

泥団子二羽の巢作りつばくらめ
笛吹けど踊らぬ世界木瓜の花
紙吹雪舞ふおぼる夜の旅一座
ビル谷間桜吹雪の中をり
世が世ならと法螺吹く叔父やシャボン玉
吹つ切れぬ思ひ残して飛花落花
少年の声は大人に燕来る

あゆみの会 (浦和)

雲雀野へ塞ぎの虫を解き放つ
春雷の去り行くまでの珈琲館
ひばり野に転がつて居る子等の声
川下り溪谷に鳴る春の雷
大空に点となりつつ啼く雲雀
蒼天に一筆書くや揚雲雀

芙蓉句会 (浦和)

白鷺のやうに紙飛ぶ春嵐
雪に転げ雪に転びつ春唄ふ
玄関に小さき達磨や春の雪

珊瑚の会 (浦和)

スーパ一の独活を横目に料理下手
四月馬鹿造花のはずが萎れをる
いくたびも席ゆづられて四月馬鹿
四月馬鹿魔女には箒吾に杖

美子
忠男
卓郎
知子
桂子
チアキ
かつ子

俱子
靖子
啓子
重子
和子
藻好

税子
仁子
美子

和子
和葉
かつ子
喜恵

AIに句を褒めらるる万愚節
口出して仕事背負ひ込む四月馬鹿
四月馬鹿豆腐の角で指に傷
エイプリルフル女形がもつとも女形らし
山独活二本迷はず求む道の駅
独活和にひかれ屋台に一人者

若枝句会 (浦和)

雪柳麻線浴ひに吹き溜まり
停戦の朝刊の文字四月馬鹿
木道に去年の葦伏せ水温む
桃源郷山の芽吹きのでんでんこ
水明熊谷句会 (熊谷)

手裏剣の如く飛び交ふ燕かな
キャンパスに御国詠が春の芝
霸王の戯るる一天地六春疾風
初つばめラマルチーヌの像掠め
小次郎の一閃かともつばくらめ
美容院頭上のせはし朝燕
煉瓦煙突かすめて迅きつばくらめ
廢校の皆野高校春の芝
槍投げの気合一閃かともつばくらめ
嫁三代捏ぬるぬか床初燕

マスミ
昇
恵子
史代
広子
節代

泰子
貞代
泰生
敏江

燈女
風子
徹平
秀子
忠男
茂子

栄子
道を
翔太
卓郎

若楠句会 (浦和)
愛犬のかほそき声や朧月
朧月まとひゆつたり散歩路
夕日浴び機影きらめく弥生かな
待つ事は生きる術なり磯巾着
戦争のなき海磯巾着ゆらり
鼻唄で祇園小唄を朧月
目葉は残業の友朧月
囀の細く悲しき日暮れかな
目覚むれば旅の風情や朧月
ヴィーナスの謎の微笑朧月
朱き橋渡れば異界朧月

たかな俳句会 (川口)

鳥帰る川面静かに輝きて
雪の果北鎌倉に街の黙
立ち飲みに頬杖つくや涅槃雪
鳥帰る一斉下校の子のやうに
お点前も作法も知らで春の宴
円卓の会 (浦和)
かんばせの御座すバゴダや花三分
軍服の像に白鳩花の冷え
気分満開桜は一分上野かな
だんまりの桜の囲む野球場

久美子
操
美津子
葉子
弘子
京子
楽

風舎
鶴城
直子
真由美

たみい
のり子
みち
小麥
鶴城

卓郎
京子
翔太
月を

手の平にひとひらの花をりたちぬ
白覗く二つに割れし辛夷の芽

桜これからエトワールへと日本人
桜愛で黒船亭のロゼワイン

身ひとつで上京した日春の朝
花上野作法も知らず辯天堂

新樹の会 (浦和)

白き羽空に打ちつけ鶴帰る
白湯を注ぐ地産の器利久の忌

利久忌や北の新地に小糠雨
卒業歌羽織着こなす小学生

さまざまの花の揃うて利久の忌
命賭す覚悟なけれど利久の忌

芽吹句会 (浦和)

春泥や祖母の胸裏富士絹か
木の芽吹く日に日に育つ嬰兒よ

春さざす真上より見し富士の山
窓の辺で詩語入れ替ふる木の芽時

春雨の街の明かりにロマン満つ
松の葉に花開くやう春の雨

春の日の富岳を過る「のぞみ」かな
庭の樹々目覚めうながす春の雨

蒼穹の雪残る富士高速道
春夕焼黒き富岳を惜しみけり

道修を

拓真

輝翠

亮一

鶴城

修雄

微雄

風子

清吉

道一

鶴城

おにこ

千重子

富子

ひろこ

久美子

小梅の会 (浦和)

春泥や小さき靴跡こかしこ
春の日や机の上の時刻表

卒業や皆んなで穿くか晴袴
枝折れし桜拾ひて朝の道

半世紀時経て集ふ春の宵
高飛びは常套手段四月馬鹿

めだか句会 (浦和)

軽やかに燕尾の剣空を斬る
燕の子こぼればかりに巢にあふれ

咲き揃ひなほ溢れたる八重桜
里山を絢爛に染む八重桜

つばくろは分度器型に忙しけり
つばくろの水面つつつと雨あがり

八重桜空を舞台にチアダンス
当選に満面の笑み春爛漫

飛燕群低く低く雨来たる
初孫の誕生迎へ桜満つて

燕来る軒に小さな風立てて
右腰に帯刀すれば濡れ燕

ひかる糸軒先に提げ初燕
花満つる校舎に子等の姿なく

越後の会 (浦和)

母譲りの大き牡丹餅入り彼岸

進文

隆然

隆文

惠子

啓子

道子

眞美子

莊志

惠美子

和子

尚己

六弦

道代

樂子

妙子

章嘉

外海の海鳴り潜む桜貝
南より帰りし娘東風まとふ

引き波のあぶくの中に桜貝
そよ風や花かたくりが左見右見

若狭水明会 (若狭)

揚げパンの抹茶パウダー杉の花
剛腕の男も泣かず杉花粉

「先祖と猫に」ただいま「旅始め
新調の帽子攫はる春一番

杉の花龍のごとくに舞ひ上がり
灯台へ波飛び上がる春一番

鈍き身に気合ひを入れて春一番
俳号に風の名多し春二番

春一番手筈を決むる野良仕事
春一番鳥居を潜り竹藪へ

春一番昼のサイレン途切れけり
引つ越しの荷物はひとつ春一番

父母の口論久し春一番
目葉の大方頬へ春一番

青葉の会 (浦和)

洋風の春の婚かな燕尾服
春の洋上航跡白く進む船

仏前に夫の好きなる山葵漬
春の宵つい誘はれて洋酒バー

宣子

眞理

輝翠

翔太

風花

笑風

寛久

風湖

保人

夕月

自然

祥子

初花

友夏

ことは

和風

旅かばん春服つめて洋上へ

筏場の清流育ちの山葵漬

洋菓子の飾り果てなし春の街

奥多摩のみやげにしたる山葵漬

洋館に深紅の椿絵画展

山葵漬あつあつごはん底をつき

なごみの会 (浦和)

大木の天辺近く鴉の巣

美容院頭上のせはし小鳥の巣

草青む全校生徒十五人

戸袋に藁糞たれて巣籠れる

春の野辺「保名」のごとき人に会ふ

柿の木塾 (浦和)

太陽に憑かれたやうに告天子

日輪の中に雲雀のホバリング

野仏も昼寝覚めたかひばり鳴

綿菓子のような雲まで揚雲雀

眼鏡拭き大空に追ふ揚雲雀

ドローンを武器とはするな揚雲雀

雲雀とは姿を見せぬ鳥なりき

水明澤つくし句会 (大阪)

蒼天に黄を吹き上げてミモザ咲く

美智枝

美子

公子

啓子

洋子

輝翠

和葉

茂子

喜恵

かつ子

節代

若鮎句会 (浦和)

かつ子

昇

章嘉

和葉

節代

恵子

和子

智恵子

洋館の和室に座する江戸雛

春炬燵いまでも夫のゐるやうな

半平太気取るをとこや春の雨

和歌山水明句会 (和歌山)

三月の水かげろふに塔ゆらぐ

雛の間を真夜に入るのをふと怖る

さり気なくおしやれして行く梅日和

花器用の白石捜す木の芽時

今宵より同じ鳥籠春の月

春の野や口笛吹きつ摘む野草

白寿とて薄く紅ひき雛祭

雛子啼く円墳の風甘きかな

人美

ノルン

洋子

和子

道子

千枝子

千世子

満耶子

さわゑ

洋子

廸代

ひとみ

稀香

貴

山菜

拓真

秀子

真

芳春

月を

喜夫

塩煎餅ゆびにしほある日永かな

老犬と歩を合はせゆく春の川

ベランダの横木で一服雀蜂

分蜂の汝とのラストダンスかな

定めから逃れしごとく飛ぶや蜂

人美

ノルン

洋子

和子

道子

千枝子

千世子

満耶子

さわゑ

洋子

廸代

ひとみ

稀香

貴

山菜

拓真

秀子

真

芳春

月を

喜夫

水明夏行のご案内

下記の日程にて水明恒例の夏行を開催いたします。参加申込書を7月号に添付します。

参加費を添えて7月17日(金)までに発行所総務部までお申し込み下さい。

大勢の皆さんのご参加をお待ちしております。

- 【夏行】** 第1日目：7月29日(水)
浦和コミュニティーセンター第14集会室
- 第2日目：7月30日(木)
さいたま共済会館602号室
- 第3日目：7月31日(金)
浦和コミュニティーセンター第14集会室

- 【参加費】** 各日1,000円
※皆勤賞を用意しております。

事業部

第10回「水明塾」の講師決定!!

10月31日(土曜日)に催されます第10回「水明塾」は、午前中に講演会を企画しました。

今回は高柳克弘講師を招いて「芭蕉に学ぶ俳句の心」と題してご講演頂きます。奮ってご参加ください。

申込み等の詳細については、改めてご案内いたします。

【高柳克弘氏プロフィール】

1980年静岡県出身。「鷹」編集長、読売新聞 KODOMO 俳句選者、早稲田大学講師。句集に『未踏』『寒林』など、評論集に『凜然たる青春』『隠された芭蕉』など多数。

事業部

令和8年 水明全国大会・懇親会のご案内

令和8年水明全国大会を下記の通り開催いたします。誌友・同人・季音同人の皆様には、お誘い合せの上奮ってご参加いただきますようお願いいたします。

■令和8年水明全国大会

日 時 令和8年6月28日（日曜日）
受付開始11時30分 開会12時 閉会17時00分
会 場 さいたま共済会館 6階 601号室／602号室
〒336-0064 さいたま市浦和区岸町7-5-14 TEL 048-822-3330
行 事 水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞・鼓笛賞・山紫賞の表彰、新誌友・新季音同人・新同人の紹介、大会兼題入選句の発表と表彰、講評等。

■水明懇親会

日 時 令和8年6月28日（日曜日）
受付開始17時00分 開会17時30分 閉会20時30分
会 場 さいたま共済会館 6階 601号室／602号室
行 事 アトラクションなど

■参加費

令和8年全国大会・懇親会	10,000円
令和8年全国大会のみ	3,000円
懇親会のみ	7,000円

■申込締切

令和8年6月5日（金曜日）
添付の指定「申込書」を使用し、参加費を添えて発行所総務部へお申し込み下さい。

※宿泊等については実行委員会へお問い合わせください。

◎全国大会は貴重な機会です。永年の会員の方々は勿論、新入会員の方々もお誘い合せの上、多数ご参加ください。

※欠席の場合は必ずご連絡をお願いします。

連絡先：青木鶴城 090-6709-1367

令和8年水明全国大会実行委員会 実行委員長

後記

六月号をお届け致します。相変わらず皆様にご支援を賜りながら、発行にこぎ着けております。ありがとうございます。でございます。

さて、六月は全国大会が開かれます。昨年は九十五周年記念大会ということもあつて九月の開催でしたが、本年は通常に戻つて六月開催です。皆様ふるつてご参加を頂きたいと思ひます。

今年の全国大会兼題は「春光」(董)そして「中」の詠み込みでした。昨年以上の一七一〇句の投稿を頂きました。ここに厚く御礼を申し上げます。秀句揃いです。見たこともないような斬新な句が並んでいて、ドキツとするような句も並んでいて、改めて水明の底力に圧倒されています。個人的には一句一句を味読させて頂いて楽しんでるのですが、句を読んで、

作者を知ると句の味わいがまた格段と濃いものになります。兼題の一七一〇句を読みとおす楽しさを会員の皆様にご先駆けて味わつてくれる訳ですが、これも役得というものではないでしょうか。

味わい深いということになります。六月号には水明各賞受賞者の受賞の言葉が掲載されています。これもまた、俳句同様に味わい深いものを感じます。俳句は「紐帯」なのだなあ、とつくづく思ひます。ところでここ数日は初夏の爽やかさの中で生活しています。風があつても厭う風ではなく、雨があつても受け容れてしまう雨のように思ふのです。今年前半の関東は少雨であつたり、高温の日があり、また気温が急に下がつたりで、安定的な気候ではなかつたように記憶しています。暑さ寒さだけではなく、例年のように過ごせることの安心感が人には必要なことのように思ひます。

かさの中で生活しています。風があつても厭う風ではなく、雨があつても受け容れてしまふ雨のように思ふのです。今年前半の関東は少雨であつたり、高温の日があり、また気温が急に下がつたりで、安定的な気候ではなかつたように記憶しています。暑さ寒さだけではなく、例年のように過ごせることの安心感が人には必要なことのように思ひます。

(月を)

今月のはてな？

虚貝 (うつけがい)

雪代山女 (ゆきしろやまめ)

耕畝 (こうほ)

砂子路 (いさごじ)

轟立 (げばだ) ちし

浮浪雲 (はぐれぐも)

巴波川 (うずまがわ)

右見左見 (とみこうみ)

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご用の方は 時間内にお願ひします。)

84 66 59 55 36 31 〃 19 頁

水明

令和八年六月号

通巻一一四九号

令和八年六月一日発行

発行所 水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区高野四一〇二二

電話 048-822-4741

ホームページ 「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一一、〇〇〇円

同人費 (誌代を含む) 一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費 (誌代を含む) 一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三三九三

発行人 山本 鬼之介

印刷所 中央美版

季音抄

山本鬼之介

少年の声は大人に燕来る
独り占む本丸跡の朝櫻
床の間にミロのヴェーナス万愚節
夜桜や塀の内なる釣瓶音
ビル街に読点を打つ花水木
大石忌番長飛ばす「押忍」の檄
さまざまな花を揃へて利休の忌
花影に揺るる青海波の袂
佐保姫やゆるり過ぎゆく櫂の音
ちんまりと青饅を盛る柿右衛門
ときめきて春筍の薄造り
創造の神に脱帽蛸蚪の紐
利休忌や北の新地に小糠雨
雛供養炎の中の母の文字
渡り瀬に腹ひけらかす小鮎かな
ソムリエの抜栓メルロー春の宵
引き波のあぶくの中に桜貝
煉瓦煙突かすめて迅きつばくらめ

石山かつ子
大橋廸代
大村節代
菊池ひろこ
五明昇
境延昭
日高道を
正木萬蝶
青木鶴城
曲淵徹雄
檜鼻ことは
原田秀子
染谷風子
池田珪子
菅原卓郎
渋谷さいち
梅澤輝翠
越田栄子

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由
枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

手繰り寄す木の間隠れの春の月
 帰る雁細波残し棹を成す
 潮騒の遅日の駅にひとり降り
 道灌と越生の春を楽しめり
 山を焼き山の輪廻を助けけり
 あさまだき今日啓蟄と鴉鳴く
 紅梅の枝垂れをくぐり小社へ
 蔵町の舟の行く手に猫柳
 公演の跳ねて二人の朧月
 道端の水仙香る漁師町
 千石船通ひし名残鯨煮る
 インカ神話の女神の話春の月
 墓碑の夫最も若し竹の秋
 ものの芽に高まる音や小夜嵐
 春北風が通り抜けたる長屋門
 鶯の調ふ声をぢつと待つ
 立春の風に煌めく波頭
 日輪へ一直線に野火走る
 岡本祥子
 倉田星歩
 森下山菜
 元田亮一
 反町修
 飯田忠男
 阿部幸代
 綿引まりこ
 皆川更穂
 寺町知子
 田中弘子
 丸屋詠子
 本橋稀香
 霜多光代
 森下美智枝
 岡田宣子
 菅原真理
 小林京子

水明例会案内	句会名	日時	会場	指導者	幹事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	菅原卓郎 小林京子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 反町恵修
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	河野はるみ 岡田宣子
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗

水 明

令和八年六月一日発行 毎月一日発行

(第九十九巻 第六号)

定価 一〇〇〇円